



# 追悼——中川滋夫氏

## 南十字星のビバーク

中川滋夫君を想う

中村 保（昭33年卒）

ダンディーで頑固、自分なりの美学とスタイルで人生を全うしたが、早すぎる旅立ちだった。今頃はアンデスの仲間——吉沢先輩、甘利さん、中島君たちから何でそんなに急いで来たのかと言わわれているだろう。そんな中川君にとって、告別式の時にご長男が話していた通り、剣岳・チンネ左稜線下部の積雪期初登攀とペルーアンデスのコルディエラ・ブランカ山群、プカヒルカ北峰6046mの初登頂は登山家として誇れる心に残り続けた記録である。

チンネ登攀は一橋山岳部の短い全盛期を飾る最後の快挙であり、アンデス遠征はペルー・ボリビア・アンデスへの日本初の本格的な登山隊の壮挙であった。秀麗なコルディ

エラ・ブランカ山群での日本人として初登頂を実現し、また長躯ボリビアに足を延ばし、アボロバンバとブヤ山群で踏査と幾つかの初登頂に成功した。アンデス登山史に価値ある足跡を残したと自負したい。

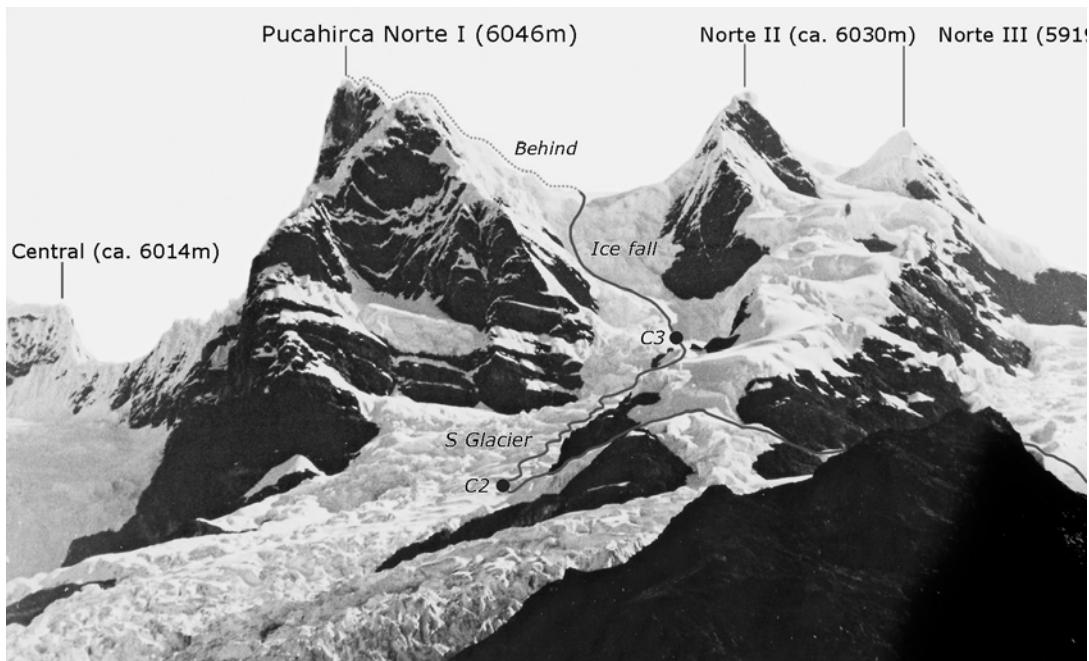
今年はアンデス遠征50周年記念のささやかな祝賀をやろうと倉知君と企画していた矢先に中川君の訃報が届いた。アンデスの七人の侍は三人に減ってしまった。折しも丸山君は腎臓疾患で闘病生活に入り、時の移ろいとはいえ寂しさを禁じえない。

プカヒルカ北峰登頂記を中村の日記から引用する。

1961年6月11日、中村・中川はC2よりC3に入る。吉沢隊長はC2に来て泊まる。すこぶる元気である。甘利・中島・倉知の一次アタック兼偵察隊は氷に悩まされて途中から引き返す。

6月12日、中村・中川・中島の二次アタック隊は午前5時40分にC3を出発する。まだ暗い。ライトを照らしてデブリを越えて氷河中央の急斜面に沿ってアイゼンを利かせて登る。そこからアイスフォール左側凹地、プロッ





プカヒルカ北峰

普して危うくクレバスに落ちかかつたらし  
い。その上がまた平坦になり三條の小さなク  
レバスのような亀裂を飛び越える。ここは上  
から落ちてくるブロックでクレバスがうまく  
たようなところで氷の凸凹で歩きにくい。次  
はルンゼ右側の氷壁の登攀、7 mほどの完全  
な着氷でフィックスを掴んでも特製12本爪  
アイゼンのセッティングが悪い所為か登りに  
くい。一次隊が一番でこずつたところだろう。  
ルンゼから離れてアイスフォール中央の氷壁  
の左下斜めに走る緩いバンド状のところに出  
る。ここが甘利・中島・倉知の11日の到達点  
である。

荷物の詰め替えをやり、9時30分登攀を開  
始する。中島トップで先ず30m右上に雪の斜  
面をトラバース、中川が続く。中村はいつも  
殿しんがを預かる。特製スノーバーで確保する。  
次のピッチは傾斜60度の硬い氷壁で難しい。  
中島がリードする。アイスハーケンを3本連  
打し、スピードアップのためステップを刻ま  
ず12本アイゼンを利かせて夢中で雪のテラ  
スに這い上がる。中島の集中力・瞬发力がも  
のを言う。雪庇を右にまいて上の台地に上が  
ると、初めてプカヒルカ北峰の全容が姿を現  
す。そこから遙か先まで緩やかな雪原が続い  
ている。しかし、目の前で、幅10数メートル、  
奈落の深淵を覗かせる巨大なクレバスが数百

メートルに亘つて雪原を分断し、進路を絶つてゐる。朝から思わしくない天氣であつたが、雲交じりの雪となる。迂回路はない。

ここで万事休すか、と三人の間に陰鬱な空気が流れる。最後の手段として、氷のブロックが詰まつて底の浅くなつたように見える辺りを選んで、クレバスの中を降りてみると一ヶ所だけ可能性がある、対岸と繋がっている部分を発見する。こちらの岸から大きなローソク状の細長い氷塔の端が非常に不安定な状態で対岸の雪庇に繋がつてゐる。登攀



C2 と中川滋夫君（左）

ルートはこの危険な氷の塔を攀じ登り、雪庇を乗り越える以外にない。

「行けるか？」積雪期チネ登攀で脂の乗りきつてゐる中川に声をかける。「やります」中川トップで強行する。高さ20mほどのテラテラの蒼氷にアイスバイルで丹念にステップを切り、じりじりと登る。氷の上でアイゼンがきしむ音だけが頭上で不気味に響く。時おりアイスハーケンを打ち込むが、氷が剥げ落ちてクレバスに反響し神経を締めつける。苦闘の末、中川は4本のアイスハーケンを使い1

時間半かかつて見事にこの氷塔を乗り切る。

午後2時30分、3人は対岸に立つ。天氣は悪化している。皆無言である。第二次登頂隊

として臨んだのでビバーク覚悟である。なだらかな氷河源頭の雪原を北峰とアメリカ峰をつなぐ稜線のコルとおぼしき方角を目指して

進む。深いガスの中を時々現れる大きなクレバスに愕然としながらも、黙々と果てしない歩みを続ける。しかし、コルまで行かぬうちにガスに切れ目が現れて北峰の頂上が見えだす。明るくなり午後の遅い陽光が一瞬ブカヒルカを照らす。懸念が確信に変る。稜線に出ればサミットは指呼の内にある。頂上直下は100mほどの急峻な雪稜である。見上げる頂はアーベント・ロートに映えて薔薇色に染まつてゐる。中川と中島がいつもラストにいた中村に「T中さん、最初に頂上に立つて下さい」と道を譲つてくれる。後輩の嬉しい配慮である。午後6時15分、念願のプカヒルカに立つ。

6時45分、ペルー・日本・一橋大学の旗をスノーバーに結びつけ頂上にしつかり差し込んでから下降を始める。雪原に降り立つて振り返ると頂上は漆黒の闇の中である。午後9時、例の大クレバスの手前でビバークする。日本の冬山のビバークより厳しい。着のみ着のままで、凍りつく寒さに膝をかかえて時間

が経つのを待つ。中川がローソクの灯で時間をかけて雪を溶かし温かいココアを作つてくれ人心地がつく。灯が消えるとツェルトの隙間を通して見える南十字星が、日本から遙か遠いアンデスにいることの充足感を満たしてくれる。夜明けの遅いことは赤道に近いアンデスの特徴の一つである。ビバークの苦痛もそれだけ長い。翌朝6時20分にビバーク地を後にする。大クレバスを渡り、雪庇の下に廻りこむと、頂上に向かう甘利・丸山・倉知の三人とすれ違う。

実は、私が中川君とザイルを組んだのはパワーしかけである。それだけに思い出が深い。また、チンネ正面壁の積雪期初登攀競争では、1958年3月にY中村さん（故人）、丸山君と私の三人が弥陀ヶ原経由で入山した。剣岳平蔵のコルに雪洞を掘り10日間ねばつたが、私の体調不良のためアタックできず、芳野満彦・吉尾弘に先を越されてしまつた苦い経験がある。そのチンネで中川君は成程を上げてくれた。アンデスと剣岳チンネ、期せずして中川君と私の縁である。ご冥福を祈ります。

## 中川滋夫君を偲ぶ

澤木 一夫（昭34年卒）

中川滋夫君が亡くなった。2月の山本尚禎君に続く訃報だった。自分より若い人の訃報を聞くたびに暗澹たる気持ちになる。

中川君は昭和32年（1957）の入部である。前年、新入部員が少なかつたことからこの年の部員獲得にはかなり危機感を持つていた。しかし、部員獲得努力が実つてか10名以上の入部者があつて一安心したのだ。この数は山岳部組織の中で次第に侮れない勢力となつていった。いつ頃だか定かではないが彼ら同期は自らのグループを「ヤロー会」と名付け結束を固めていった。その中心にいたのが中川君である。彼は高校時代から登山をやつていたのか一頭地を抜きんでていた。なにしろその年の新人歓迎山行の代わりに5月の連休に八ヶ岳にいったのだからその実力は推して知るべし、である。

彼らの結束力が遺憾なく發揮されたのは1年の夏合宿である。この年は雨に祟られ、当

初計画を大幅に変更しなければならなくなつた。そんな中で1年生の「ヤロー会」グループはリーダーの指示に忠実に従い命令を全うした。チーフリーダー岡垣さんは、彼らの奮闘ぶりに余程感激したのか「針葉樹12号」にこう記している。

（承前）天候は7月18日剣沢三田平に定着以来7月28日撤収まで晴天1日という有様だった。（中略）しかしながら、われわれは最後まで頑張つた。雨と暴風の中で炊事し、びよびよの寝具の中で眠つた。全員一致協力、命令は最後まで守られ、明日の米が心配になるまで粘つた。特に、われわれの最も期待し、かつ心配した新人「ヤロー会」の10人は一言の不平も出さなかつた。（後略）

このような経験を経て中川君を始めとする「ヤロー会」の面々はH U H A Cの中枢を占めるに至つていった。

私が3年の春合宿に剣岳を選定したことにについては以前会報に記載したが、私の敷いた路線を後輩たちが踏襲してくれたことは、私にとってとても嬉しいことだつた。

私の次の渡辺君（彼も彼岸の人となつてしまつた）の時は赤谷尾根から剣岳、毛勝山登頂を成し遂げ、更に中川君の時に至つて剣岳

周辺のヴァリエーションルートをいくつも登った。その中で中川君はチーフリーダーとして全体を統率する傍ら「積雪期チンネ左稜線登攀」という快挙を成し遂げた（当初初登攀と思っていたら、どこかの好世家に調べられ、現在第二登に認定されてしまっているのは誠に残念だ）。これは正しくアンナブルナのフランス隊隊長M・エルゾーグを髣髴させる行動ではなかろうか。私がH.U.H.A.Cの歴史について言及することは僭越だが、彼の快挙は戦後のH.U.H.A.Cにあって甘利さん、T中さんの実績と双耳峰を成すものといえるだろう。

これ以後も中川君は本道を歩き続けた。1961年のアンデス遠征には選ばれて参加し、ブカヒルカ北峰他いくつもの初登頂を果たしたことは周知のとおりである。

一方、私は諸々の事情から山から遠ざかってしまい山岳界の情報に疎くなってしまったが、近年IT時代となり、P.CからH.U.H.A.Cのホームページが簡単に見られるようになつた。

いつだつたか、佐薙さんが主宰されている三月会の会合で、中川君が「ハイキングもいいけれど、ロッククライミングを始めてみませんか」と発言しているのを見て、まだまだ先鋭的な気分は衰えていないなあ、と頼もし

く思つたものだ。

その後どんなパートナーを得てどんなルートを登つたか読む機会はなかつたが、もし、実行出来なかつたとすればきっと心残りだつたに違ひない。

好漢の早すぎる死を誠に残念に思う。

## わが英雄

倉知 敬（昭38年卒）

如水会館でのその忘年会（2010・12・17）に顔を揃えたのは、中村、丸山、大橋、丸子、有賀、三森の諸氏に加えて、山本尚禎、中川滋夫という、その時には思いもかけぬ急逝二氏。中川さんはこれが結局最後の顔合わせとなつたが、帰りがけに「コーヒー飲んで行こうや」と誘われ、三森さんを加え三人でまた長話をした。都合があつて私だけ、まだ話しつらなさそうな中川さんを振り切つて途中で失礼したが、何とも未練の残るお別れとなつてしまつた。

つい先頃まで暑いアツイと云つていたのに冬ゴモリのシーズンになつてきました。南洋に十幾年いたせいか寒さには弱くなりました。草々。 中川滋夫 拝  
(2010・11・5)

連絡には、他の人には携帯電話のメールで簡単に済ませていたが、頑なに現代風を拒否する中川さんには、その都度ハガキを出すなどしなければならなかつた。上記は、その直近の集会通知に対する、中川さんからの返信ハガキ（紅葉の夜又神峠から見た白根三山の絵葉書）、残念乍らこれが私にとつては絶筆の来信となつた。

如水会館でのその忘年会（2010・12・17）に顔を揃えたのは、中村、丸山、大橋、丸子、有賀、三森の諸氏に加えて、山本尚禎、中川滋夫という、その時には思いもかけぬ急逝二氏。中川さんはこれが結局最後の顔合わせとなつたが、帰りがけに「コーヒー飲んで行こうや」と誘われ、三森さんを加え三人でまた長話をした。都合があつて私だけ、まだ話しつらなさそうな中川さんを振り切つて途中で失礼したが、何とも未練の残るお別れとなつてしまつた。

最後の声を聞いたのは、尚禎さん逝去翌日（2011・2・26）に横浜のご自宅弔問帰路に架かつてきた携帶着信。実は前日讣報を知らせるべくご自宅へ電話したのだが、「入院中です、病院へは架けられませんが本人へ伝えます」という。家族との対話の結果がこのコールバックだつたのだ。その時まで病気とはついぞ知らなかつたので驚いたが、と



剣岳八ツ峰Cフェース登攀後の中川（右）と倉知。1960年3月18日、Cフェース登攀後、同日には八ツ峰下半部を登った中島・小林ペーティとの合流、お互いの雪まみれ姿を撮り合ったときの勇姿。この4日後、中川さんはチネネ左稜線を初登する。

りあえず計報が伝わればよし、見舞いとかは後のことだと思っていた。

「イヤー、ショーティのことは驚いたよ」、とその時は随分元気そうだった声に安心したし、「退院はまあ3月中旬かナア」と言う。

大腸ガンだというのだが、昔腫瘍を切る治療をしたこともある私は、あれは切り取ればいいのだから、と思い込むことにした。とにかく退院まで待つて、快気祝いの集まりでも企画しようか。

それから間もなく東北大震災（2011・3・11）。千葉の埋立地住まいの身では、器物諸々大破壊、余震度々緊張しばしば、と暫くは身辺慌ただしく過した。そろそろ退院し

ただろう、と震災後一週間もした頃電話してみたら、奥様が出られて、「退院はしますが、経過はあまり良くなくて、……電話に出られません、お見舞いは結構です」という意外な展開となつた。

なにしろ尚禎さんのことがあつたばかり、まさかのこともあるかもと心配する中村さんと相談して、近々にもアンデス生残り三隊員打ち揃つて無理にも自宅見舞いに押し掛けようか、と申し合させていた。

そして又一週間。三月二五日、外出して戻つたら携帯電話（普段は不携帯なので）の着信記録に中川さん宅電話番号があった。まさかと思いつつ直ちに返電、「今朝亡くなりまし

た、まだ誰にも連絡していないが、ヤロー会ほかに伝えて下さい、葬儀はこれこれ……」と言う。唯、絶句あるのみだ。

### 私の中川滋夫論

一橋山岳部に入った時、一学年上級に何やら世長けた風の人たちがゾロゾロと揃つて、徒党を組んでヤロー会と称するのだと聞いて、少なからず気おくれしたものだつた。ところがヤロー会一同の存在には、登山のみならずあれこれ人生長く、大きく依存する運命になつたのだから、先のことはわからない。在学中はもとより、卒業しても更に引退しても、常にヤロー会の誰かが助けてくれたり、肝胆相照らす相手になつてくれた。誰もが各々個性豊かでもあり、それぞれに関わり方も様々だつたのだが、なかでも中川さんからは、新入部員への登山の手解きから始まって、何度も共に登る機会を繰り返す中で、一際強い影響を受けた。

下級生の立場からは、一学年上級のチーフリーダーは特別の存在だが、実際にも登攀に関わる考え方や技術を習う過程で得たものには、ほかのヤロー会諸氏とは一寸違う重みがあった。登山に対処するセンスに魅せられたとか、技術の高さに教えられるところが大きかったのである。

例え、小谷部さんへの評価とか当時の大学山岳部の実績について、初めて教えられ認識したのは、中川さんを通じてであり、また、氷雪登攀向きの当時は稀少な舶来アイゼン（シモン製）を履いて登る格好良い中川さんが、実際に巧みな技術を見せるのに感銘したものであった。

その頃、大学山岳部の間で積雪期合宿の狙いを競う動向が見られた。その中でどう自らの意欲を發揮するか——、その帰結が剣岳チネ登攀などに至つたのには、先輩が積み上げてきたもの、ヤロー会一同の実力、などに加え、中川リーダーのセンスに依るところも大きい。その辺の事情については、会報一九号「一橋山岳部の軌跡」に書いたところだ。中川滋夫・小林進二・パーティによる一九六〇年三月二二日・剣岳チネ左稜線（下半）積雪期初登攀は、日本登攀史に残る記録の一つとなつたのだが、「軌跡」に書き切れなかつたその背景について、佐伯邦夫「剣岳登攀史序説」（『剣岳をどう登るか』北国出版社一九七六年刊・所収）の一節を引用したい。

「劍のみならず、全国的にみて、昭和三十三、四年（一九五八、九）を中心に戦後の積雪期の岩壁登攀の大きなピークがあるようと思われる。たとえばチネは、戦後はじめ

て登られたのが昭和三十三年の三月で、それから三十六年までの四年間に十いくつかあるチネの全ルートが登られている。：（三十三年のアルムクラブ、魚津岳友会などの登攀以外一般山岳会はなく）…全部大学山岳部であるところに特徴がある。すなわち法政（三十四年・中央チムニー、左方ルンゼ）同志社（三十三年・北条、新村ルート）関学（三十五年・左下カンテ、中央チムニー左岩壁）一橋大（三十五年・左稜線）成城大（三十六年・上部正面、左方カンテ）などである。」

日本近代登山史のはじまりは、大正から昭和に至る時期に、その頃輩出した大学山岳部が担つたのであるが、その輝きが戦後の一時期にまた蘇つたかのようであり、一橋山岳部もまたそれに参画したのであつた。剣岳の積雪期登攀に集中したのは、やはり山が深くて登るには長い日が必要だったからという事情があつたからだろう。どこを登るにしろ、キャンプをいくつか建ててからやつと取付くところまで來るのであり、チネを登るにはまず極地法による物資運搬をして、頂上に基地となるキャンプを設けるのが大方のやり方だつた。

戦前の岩場開拓期には、各大学はじっくり

時間をかけて辺鄙な山奥に入り込んで積雪期の登攀を手掛けたのであり、それらは前山の峠を越えるとか裾野をスキーで辿るとかの手順が伴つた。戦後の雪の剣に限つては、昔と同じ条件がまだ続いていたわけだ。剣の奥地に未踏の壁あり——当時の最先端標的をすかさず捉えるには、相応のセンスとそれを完徹する実力、が最も肝心なものだつた。そして、こうした動きに敢然と対応出来た大学山岳部の向う方向は、やがて積雪期登攀競争から海外登山競争へと至る。

さて、その翌年、関学と一橋は、仲良く両校チネ登攀者も混つて同じ船でアンデスに向つた。そして中川さんは、パカヒルカの氷壁を突破するルートをトップで切り拓いた。一九六一年のアンデス遠征は、山岳部創立期に活躍した吉沢大先輩の主導力組織力、実現への機動力となつた中村さんの熱意、という重要な二大要素が支えていたが、更に当時最先端の登攀実力を有していたヤロー会、なんぞく中川さんの技術的貢献も成功に導いた大きな要素だつた。

こうして、戦後の一時代を劃して一橋山岳部が果した二つの実績は、中川さんという人が不可欠な役割を担つて達成された。この学生登山界登攀史上のハイライトは、しつかり記録に刻んで伝えられるべきことであろう。

## アンデス以降の展開

さて、中川さんは、アンデス以降も、卒業直後の針葉樹会仲間と、当時はOB合宿と称した積雪期登山などに情熱を燃やした。そういう仲間から、次の海外遠征の機運が高まり、一九六七年にはヒンズークシユ遠征が実現されていく。ところが、中川さんに限っては、卒業後数年してあっさり登山から離れていつてしまつた。

アンデス以降の数年にわたる、主に正月休みなどに繰り返した積雪期登山のことは、大手は『針葉樹会報』に簡単な記録が記載されている。それらが中川さんの山歴のほとんど最後の部分となるので、この際まとめて列記しておきたい。いうなれば山岳部時代の延長であり、そこでは相変わらず皆をリードする存在でもあり、またいつも度胸ある登り方を發揮したのであつた。

一九六二～六三。就職直後で余裕もないせいか、夏季休暇を利用した登山だけで、最初の年は山岳部夏合宿の滝谷遭難救出で終り、次年の年は笠ヶ岳東面穴毛谷の岩登り。

一九六四。大晦日より明神池畔にベースキャンプを設け、好天に恵まれて穂高の主たる雪稜三本、いずれもほぼ終日がかりの長いルートを登つた。すなわち一月一日に明神主

稜から同主峰に達し明神五峰まで縦走、東南稜を下降。三日、涸沢経由で北穂東稜を登攀。五日、奥又白谷より前穂北尾根登攀（松高ルンゼ、四・五峰間ルンゼ経由）。

この年は更に、五月連休に不帰I峰尾根登

攀、夏には内藏助沢から剣北面池の平へ。

一九六五。湯俣谷に入り、一月三日、北鎌尾根（独標側稜経由）登攀、槍ヶ岳登頂。

五月、鹿島槍荒沢に入るも、悪天で大滝から敗退。

一九六六。穂高岳沢に入り、一月三日畳岩尾根登攀。前日コブ尾根に向つた別隊が帰らず、捜索を兼ねて畠岩尾根へ（当初南稜予定も）。ビバーク後のコブ尾根隊と呼応して登つた。

上記はすべて私も一緒した山行だが、他にも会報に書かなかつた記録があるかもしれない。この中でも、六四年の冬季穂高ヴァリエーション三ルート一気登攀の爽快な記憶が思い出深い。冬には珍しい好天に恵まれたからこそ出来たことだが、いずれも気力使い果たす長時間行動であり、思い付いたら次々と、こういう登り方を決然としてやつてしまふ、という成り行きには、中川さんの意志が大きい働いていたと思う。

こうした登攀の体験は、その余韻が次の遠

征企画のエネルギーとなるのだが、中川さんの場合はそうではなかつた。そこについたのは、何をやつても、かつての剣やアンデスでの初登攀の陶酔に及ぶ程の情熱も湧かぬ、といった醒めた気持ちだったのだろうか。現実的には勤務の都合や面白さに埋没しただけかも知れないが、その一方で、ある時期は高潮した形而上的なものにもはや精神を託すまでもないという、ある種の倦怠感が心の奥底にあつたのだろう。

同じ様にアンデスに行つた中島さんや私は、そこで新たに何か火を点けられた面があつて、アンデスは次の展開への過程となつたと言える。中川さんの場合は、歴史が弾けた時期の山岳部を背負つて自己完結したという思いが既に内在しており、その後は多分迷いながらも、結局のところ余韻に浸るだけでもよかつたのかも知れない。

### 登攀の想い出

中川さんにまつわる記憶の中で強く残るのは、何といつても共に登つた登攀体験である。いろいろなお付き合いを通じて、やはり初期の登山活動で何かと教えられた追憶がとくに印象深く、私の心に刻まれている。

最初の強い印象は、初めて積雪期登攀なるものをさせてもらつた剣八ツ峰六峰Cフェー

ス（1960・3・18）にある。中川さんは、チンネ初登攀計画直前の小手調べに、私を相手に選んで、それを登ることにした。折悪しく小雪舞う不安定な天候、ろくに壁の上部は見えないが、構わず私にトップで登れと指図



ボリビアのアポロバンバで。  
左から、中島寛、マルチネス（ボリビア山岳会）、甘利仁朗、中川滋夫

する。それからは、唯々崩れ落ちそうな雪の壁にへばり付いて何匹ツチかザイルを延ばすだけ。あまり効かなさそうなピッケルを埋め込んでの確保だから、どちらかの足元が崩れたら一蓮托生である。幸い事無く登り切った

が、終つてみればまことに良い体験をさせてもらつたのであり、所詮山はエイヤッと登るしかないと知つた。

登攀史の記録を見ると、Cフェースは丁度一年前の春に名古屋大パーティーが登つたのが積雪期初登（1959・3・28、中井弘治、石川日出男、積雪期八ツ峰側壁最初の登攀）とあり、その後一シーズンでいくらも登られてなかろうから、当時のレベルとしてはまだ結構なものだつた。

その翌年、アンデス遠征に共に参加する運びとなつたが、隊員が毎度別れてパーティーを組んで登つた中で、どういうわけか同パーティーになる機会がなかつた。プカヒルカ登頂では、中川さんらが初登、私は第二登パーティーになるが、肝心なところはフィックスザイル頼りで何なく登つた。ボリビアの山に入つてからは、ずっと別々のパーティーで別の山域で登つた。しかし、中間のベースキャンプ移動時期に、二人だけで撤収直前のベースキャンプに滞在、物資移動用トラック待ちの何日かを無聊のまま過ごす機会があつた。

アポロバンバ主脈から外れた対岸に、一際目を惹く切り立つた岩峰があつた。或る日、突然中川さんは、アレを登りに行こう、と言ふ。一も二もなく私も賛成、もう昼過ぎだつたと思うが直ちに行動に移し、その日の内に

その岩峰の基部まで入ってビバークした。

他の誰にも黙つての勝手な行動なので気が引けたが、まあ行けるところまで登つてみるだけのつもりだ。翌朝（1961・8・3）、壁の基部に入ると、岩は崩れやすく、所々の雪田は不安定な固雪で、ともすれば足元がすぐわれる。壁の傾斜はきつく、ほとんどスタッフでザイルいっぱい伸び、交互にトップ交代する。これは意外に難しくスケールも大きい、引き返そうかとも話し合つたが、岩が緩くてそこは懸垂下降も無理。登り切つて反対側の岩尾根のコル経由で、固そうに見えた垂壁を懸垂下降するしかないだろうと思われた。

それから先は、エイヤツの思い切り登攀が続く。浮いた岩を搔き落とし、岩間に挟まつた氷を削つては一步擦り上がる、という繰り返し、どちらかが足を踏み外したら止まらんだろう。次第に日が傾いて來たが、それと共に壁の左右の幅が随分縮まって來て、ピラミッド型の岩峰の先端に近づいているのがわかつた。夜明けとともに登り出して、薄暗くなるころやつと斜面が緩やかになって、半分だけ雪の積る頂上に達した。

暗がりの下降がまたやつかいだ。岩尾根の鞍部近くまで下つたところから、ライト頼りの懸垂下降に移る。苦労して確保用のピトン



アンデスから帰途の船上で。乗船の第五真盛丸出港時、見送りに来てくれた在留邦人の娘さんたちと記念撮影。左端の中川さんは、若い頃の風貌がよく出ている。

晩年になつてからの登山は一度だけだった。たまにはアンデス組だけで登ろうか、ということになつて、二〇〇二年大晦日、丸山、中川、私の三人で、丹沢・大室山に出掛けた。抜けるような青空、西丹沢バス停からやおら、風もない穏やかな山歩きを楽しむ。山頂はすっかり雪に覆われ、北に向つて道志側に微かな踏み跡が下つてゐる。久保へ二時間と書いてある道標もあり、往路の夏道を引き返すのもつまらないので、正面に雪の蛭ヶ岳を眺めながら足跡沿いに道志の谷に下る。しかし谷底の神ノ川までの道は長かつた。膝が痛むという中川さんだけ、下りには随分遅れて、氣の毒だった。

その後膝は回復したらしく時折登山を続けられ、聞けばまだ岩登りに興味あると言う。最後に会話をした機会には、北岳バットレスに登れなかつたことや、今昔登攀流儀比較の話が盛んだつたが、そういう姿にいくらく本身がアンデスでの最もきびしい山となつた。

明るい岩場の懸垂下降は、うそのように樂ちんである。翌朝、何なく下の平地まで下降、まことに命拾いした思いだつた。思えば、これがアンデスでの最もきびしい山となつた。

という話は聞けず終いになつたが、とは言え多分もはや本音はただ楽しめばいいということだろう。だからと言って、あの時代に高揚した精神の光芒輝く中川さんという人は、なお英雄であり続けることに変わりはない。



丹沢大室山頂にて（2002年12月31日、丸山則二撮影）

## 北岳バットレス第四尾根に向つて

竹中 彰（昭39年卒）

中川さん（通称アンリ）は小生が一橋山岳部に入部した時（S 35）のチーフリーダーで、新米にとって遙かに仰ぎ見る存在であつた。この中川さんを中心同期でヤロー会を組織し、一橋山岳部で傑出した存在であつた甘利、T中・Y中の時代を更に組織的に飛躍させた原動力であつたことは周知のことである。

この中川さんから、2007年頃の三月会の場でバットレス第四尾根の話題が出た時に、ご自身の第四尾根登攀50周年記念として登りたいとの意欲を示されたことに竹中が賛同し、周囲の会員に話をしていたところ金子（S 46）が加わり、他の若手のO B（山田H 16）の協力が得られることになり計画具体化に向けて動き出した。

最終的に2010年秋に北岳に向つたのは、中川、竹中、金子に加えて、この間常にサポートを惜しまなかつた本間（S 40）さん、

それに今回の計画推進に大きな力となつた藤原（S 44）の5名の針葉樹会高齢者会員である。結果的に時間切れで途中撤退となつたが、中川さんが最後に試みた本格的な山行、しかもお好きだった岩登りの記録として意味あると考えここに記すこととした。

最初は2008年8月のバットレス登攀を目指して、8月1日に山田の指導で、最近の岩登りの手ほどきを受けるべく高麗駅近くの日和田山に出かけた。中川、金子、竹中が3本ほどのルートを登り、ハーネスとザイルの接続方法から始め、エイト環を使っての懸垂下降などを練習した。

決行日を8月下旬と定め、準備を進めると共に、バットレス組以外に白根御池小屋からサポートを兼ねた、北岳周回コース参加者も募った。この年は天候も不順で出発日の設定が難しく、当初8月26日の予定であつたが、現地に先行した周回パーティー（本間、仲田）からの電話連絡で3日ずらして29日としたが、当日まで現地は雨が降り続き、八本歯への登路も落石などで危険な状況となつたことに加えて、29日当日の中央線が不通になるなど、計画断念の已む無きに至つた。

翌年も参加者の都合が折り合わず、計画は具体化しないままに終わつた。

2010年に入って、三月会の場などで中

川さんが「未だバットレスは諦めていない、早めに日程だけでも確定しておこう」と主張され、10月の初旬を想定して計画を復活させることとした。三月会の若手メンバーから、藤原が関西勤務から千葉に戻つて積極的にクライミングに打ち込んでいるとの情報がもたらされた。その後藤原との連絡が取れ、全面的な協力が得られることになり、バットレス登攀までのトレーニング計画も決定し、現地実地指導を受けることとなつた。

第1回トレーニングは9／12（日）に奥多摩駅近くの所謂「氷川屏風岩」で中川、竹中、藤原の3名が参加した。9時過ぎに奥多摩駅に集合し、駅から2ピッチ弱の急登をこなして、岩場基部に到着。早速左側のクラックのルートを登り、その後は右側のフェースを登る。何れのルートでも藤原が長い手足で軽快に登る姿を初めて見て感嘆、彼がリードしてくれるならと大いに安堵した。

クライミングシューズのフリクション、微妙なスタンスの利用、エイト環での懸垂下降等を練習する。幸い日曜日にも拘らず我々だけの貸切状態で、成果は大きかつた。

第2回トレーニングは9／22（水）～23

（木）信州／川上村・川端下にある藤原の別荘に前記3名に加えて金子、食糧計画担当の本

間の計5名が集結し、一泊二日の小川山合宿を行なつた。別荘から10分弱走つた廻り目平キャンプ場に駐車して幾つかのボルダー岩を見て周り、少し触る。その後サイドストリー

ムと呼ばれる岩場に回つてロープを使って岩登り、ATCによるビレー、懸垂下降の練習など。

翌日は天候悪化の予報であつたので、計画

した屋根岩2峰のマルチピッチ練習は中止、

朝は曇り空の下でボルダー岩を幾つか回つて

スマーリング（シューズのフリクション）の

練習などに切り替え、その後は屋根岩基部を回るパノラマコースを周回した。駐車場に引き上げる5分位手前で集中豪雨に遭遇、濡れ鼠で別荘に戻る。

2回のトレーニング成果を踏まえて、愈々10月に本番のバットレス第四尾根に向かうことになり計画の詳細を藤原、本間で詰めて決定した。

当初は10／4～6での実施計画を前週末からの全国的な天候悪化が4日まで予想されたので、1日後ろにずらして5日～7日の計画とした。また、下山後に「針葉樹文庫」が設置されている芦安の山岳館に立ち寄り、塩沢館長に挨拶することも予定した。

## 北岳バットレス第四尾根登攀

10／5（火） 晴れ時々曇り

あすさ3号に乗車し、甲府駅で落ち合つた。

食料担当の本間は両手に抱えきれない程のテントと食材を持ち、金子もテントを抱えて改札を出てきた。最初は白根御池小屋泊を考えたが、早朝立ちや、仲間だけの気楽さを考えし、テント生活に切り替えたため荷物が大幅に膨らんだ。

駅前タクシーの呼び込みと交渉し、広河原まで1人2200円（11,000円／台）で妥協して乗車。10:50には広河原に着き、荷分け、パッキング、昼食後11:30にスタートする。広河原山荘で登山届けを提出し、暫らく尾根筋急登ルートと一緒に道を辿る。

11:45に分岐で左折して大樺沢に入り、沢筋に沿つて進むが、橋を渡つた後は殆ど右岸通しに進む。今回の様に重荷の時は大樺沢は大変歩きやすいルートであった。最初のピッチを1700m地点で刻む。その後30分刻みの4ピッチで二俣に到着。この間中川さんは持参のビデオカメラで周囲の景色や一行の登る様子を熱心に撮影していた。

ここで、藤原が荷物をデポし、バットレス沢に入り取り付き点の確認に出かける。他の4名はそのまま御池小屋のキャンプサイトを目指す。一股からの標高差はネット20m程度

にも拘らず、木の根や岩がゴロゴロして歩き難い道をアップダウンして 15:20 に到着 (245 m)。一息入れて、本間の 3 人用と山健さん遺品のアメリカ製 4—5 人用テントを設営する。小屋に届けを提出し、一人当たり 500 円のテント料を支払う (一回当たり料金)。小屋も建て替えられており、立派な洋式水洗トイレが付設され、水場もキチンと整備されていた。池を前に快適なサイトであった。その後男女 (山ガール風) 4 人組が少し離れた所に設営した。

藤原が偵察から戻つたところで、藤原が担ぎ上げたビールで乾杯。その後本間お得意の焼網を使つたシシャモなど、豊富なツマミで日本酒、中川さんはウイスキーなどを酌み交わしながら明日の完登を誓う。翌日に備えて自重した所為か、2L の日本酒パックは空かなかつた。空には星が綺麗に輝き、明日の好天が約束されている様だった。19 時過ぎにはシュラフに入る。

## 10／6 (水) 晴れ時々曇り

3 時過ぎに食事の本間が起きて歩き回る足音を聞いて起床する。準備を整え、餅の朝食を摑つて、4:30 にヘッドライトを点けて出発する。サポートの本間とは 12:30～13:30 頃に北岳頂上で会おうと約束す。4:50 に「僕を

通過するが、チップ制トイレ用発電機は 24 時間運転の様であった。最初のピッチは 2340 m 地点で切り (5:11～15) この頃から足元も、ハツキリしてくる、その後 5:50 に八本歯のコルに向かう一般道との分岐を過ぎ、少し上がつた所で少憩 (2530 m, 5:55～6:00)。

ザレタ岩屑の道、灌木帯の道などを辿り、b ガリー大滝右の下部岩壁基部に到着。(一) で 50 m ザイル 3 本を用意し、各自ハーネス、ヌンチャク等を準備、2 本のザイル (一本は竹中、他の一本は金子と結ぶ) をアンザイルンして藤原がトップで登る。岩はシッカリして快適であったが、50 m × 2 ピッチ上の上部ビレー一点テラスに上がる前後には細かな浮石が多くザイルが触れてバラバラ落石する (7:53 テラス、2775 m)。金子・中川ペーティーも集結してザイルを解き、草付き混じりの踏み跡を辿つてトラバースするが、第二尾根基部の辺りで少しルートが判然とせず、ガリーを直上するが誤りと分かり引き返して進み不安定な岩石が積み重なつた c ガリーを横断する。

その辺りに赤ペンキで 4 尾根への矢印が記されていた。そのまま灌木などを分けながらトラバース気味に進んで第四尾根の岩壁最末端に着く (9:00)。(二) で少憩し、行動食を腹に納めている間に藤原が再び 2 本のザイルを

結んで登りだす。直ぐに岩に遮られて姿が見えなくなる。竹中がビレーするザイルは順調に伸びていく。50 m 一杯伸びきつた所で合図があり、竹中が続く。

50 m 一杯伸びている為一段上がつたスチップで 8 の字結びをセットして登りだす。最初は直上したが、次の段から上がる所で 2 本の残置ショーリングを掴んで身体を持ち上げようとするが、スタンス、次のホールドに自信がなく、一旦段まで降りて右の凹角に入る。この間「ザイルを上げて、緩めて」との指示が上の藤原に伝わり難く苦労する。結局諦めてもう少し何とかなりそうな右に回りこむ。(三) も最初は進むが、直ぐコケ付の岩と微妙なホールド、スタンスに苦労して時間を食う。下のテラスから金子が見上げているが、(三) を抜けると下からの視界は閉ざされた。何とか凹角を抜けて開けた左のフェースに移つてからは固いフリクリクションの良く利く岩となり、そのままザイルに導かれて藤原と合流する (10:25)。結局この 1 ピッチに 1 時間位要した(二) になり、些か自信を失う。上部テラスのビレーポイントはコーナークラック直下であった。その後金子も上がってきて 3 人合流し、中川さんは(三) をギブアップするとの伝言が齎され、頂上に抜けるには残された時間も厳しくなつたため撤退を決断する。



北岳バットレスに挑んだ中川さん（2010年）

少し不足気味だったが、何とか上のステップまで達して、OKの合図が来る。最初は稍々緊張気味に下りだが、固い岩のフェースに出てシューズのフリクションも快調に利き登る時の凹角に振られ気味になるのを何とか体制を立て直して金子、中川さんと合流する。

藤原はcガリー側の草つきをノーザイルで降りてきて全員集合となつた。然し、この間に懸垂用ザイルを回収しようと、引つ張つたところ途中の岩角に1本が引っ掛け、藤原が再度登つて難なく回収してきた。そこからは登つて来たコースを逆に草付、灌木帯を抜け、cガリーを横断して下部岩壁の上部終了点に至る(12:25)。ここで再び50m2ピッチの懸垂下降を行なう。降りた所が岩屑の不安定なbガリードったため、ここも懸垂で下り、小高くなつた尾根状のところでザイルを収納する。

これで、金子が北岳頂上で我々を待つていて、今登つた所を50mザイル2本使ってエイト環で懸垂下降する。上からザイルを落とすが、下の様子、ザイルの状態がハッキリしないので、最初に金子が確認しながら下降する。撤退はコーナークラックのピンを支点として、今登つた所を50mザイル2本使ってエイト環で懸垂下降する。上からザイルを落とすが、下の様子、ザイルの状態がハッキリしないので、最初に金子が確認しながら下降する。

い経過した頃「ヒトーツ」のコールが聞こえる。テント場上部の小太郎尾根方面を見ると、はるか上に人がジグザグに降りて来るのを発見し、こちらからもコールを返す。暫らくすると本間が降りてきた。朝8時過ぎに出発し、足に痙攣が来るなど八本歯のコルへの登り(今やハシゴの連続のこと)に苦労して、本間が頂上に着いたのは14:30頃とのことで、既に我々は頂上を後にしたと理解し、降りて来たとのこと。前回の白峰三山縦走時も含めて本間にとって八本歯のコルは鬼門である様だ。その後15分で金子も帰着し、無事に全員揃つた。本間は八本歯に登る途中で我々の声をハツキリ聞き、コールしたとのことだが我々は全く気が付かなかつた。

相互に情報交換した後で、宴会、夕食場を本間テントに定め、乾きもの、ビーフジャーキーなど豊富なツマミで宴会を始める。昨日の残りの日本酒を空け、新たな2Lのパックを開ける。夕食は海鮮サラダ、漬物付きのウナ丼であった。本日の四尾根取り付き点やザイルパーテイーの組み方の反省などを話し合ひながら夜も更けていった。

10／7（木） 晴れ  
広河原へ下山するだけなので、ユツクリ起床しフカヒレ雑炊の朝食を摂つて、テントを休憩しながら水汲み等に精を出す。30分くら

撤収する。白根御池キャンプサイトを7:55にスタートする。下山路は急な尾根筋に沿る。出発して暫らくはなだらかな道だが2100m頃からは急坂になる。最初のピッチは2040m、次は第一ベンチ、大樺沢コースとの分岐(1580m)、広河原山荘と順調に進み、10:23のバスには余裕を持って到着するが、広河原山荘前で山菜取りに来ていたオジサンに甲府までのタクシーを持ちかけられ、芦安内での移動、待機を含めて一人2200円で交渉成立。ジャンボタクシーで広河原を10:20に出発。芦安では山岳館下の南アルプス温泉に立ち寄る計画だったが、タクシーが前を素通りするので、慌てて止めると、温泉は先月末で営業を止め建て替えに入ること。已む無く金山沢温泉に向かう。丁度温泉が営業開始した所で、口開け一番の客で入浴する。露天風呂もあるなかなか良い温泉であった。

その後タクシーで山岳館に向かい、塩沢さんに挨拶しようとしたが、館長は北岳に行っているとのことに、思わず本間と顔を見合せる(事前の情報では昨日下山して今日は山岳館にいる筈であった)。聞けば昨日はガスでヘリコプターが飛ばず、本日下山の道中のこと。展示物等も充実してきた館内を見学し、甲府に向かい、駅ビルの杵屋で軽く反省会し、始発の「かいじ」で帰京。

トレス第四尾根登攀は未完で終わってしまったが、中川さんの希望に沿って最後の登攀にご一緒できたことは未完に終わった悔しさはあるが、大事な思い出に残るものとなつた。一橋山岳部1年の時に始まる50年間の長きに亘るご指導本当に有難うございました。心からご冥福をお祈りいたします。

残った我々は自然条件、社会条件が許す時点で再度第四尾根に取組み中川さんの遺志を何とか貫徹したいと考えている。禁止解除のタイミングと高齢化する当方の体力減衰の追つかつこになるが、何とか自身の想いとして実現に向けて努力を続けたい。

### バットレス再訪—追悼 中川滋夫氏

金子 晴彦(昭46年卒)

ぼくはほぼ一回り先輩の中川氏と親交は無かった。タイで商社マンとして大活躍しているとの噂を聞いたことがある。あの暑さの中

中川さんが長らく青春の貴重な想い出に、強い意欲を持つて再トレースに取組んだバットレス第四尾根登攀は未完で終わってしまつたが、中川さんの希望に沿って最後の登攀にご一緒できたことは未完に終わった悔しさはあるが、大事な思い出に残るものとなつた。心からご冥福をお祈りいたします。

残った我々は自然条件、社会条件が許す時点で再度第四尾根に取組み中川さんの遺志を何とか貫徹したいと考えている。禁止解除のタイミングと高齢化する当方の体力減衰の追つかつこになるが、何とか自身の想いとして実現に向けて努力を続けたい。

今から53年前の昭和33年8月末、当時2年生だった氏は同期の馬場氏と2人だけで4尾根に向かつた。その夏の涸沢合宿で滝谷2尾根、涸沢槍東稜を登つて本格的岩登りの手ほどきを受けたばかりの夏だ(この合宿こそは後の「ヤロー会」と言う超過激集団の出発点となつた)。初めての山なのに先輩が同行するわけでもなく、池山吊尾根から大樺沢への下降路が分からず、適当な沢を下り、「二股とおぼしきあたり」で実に3日間も雨に降り込められた。そして8月27日、cガリーから4尾根末端に取り付き、7時間半かけて完登している。その半年前の2月21日、甘利仁朗7年生が中央稜の冬季初登攀を成し遂げているという環境もさることながら、若さの力が感じられる登攀だ。

2008年1月に発行された針葉樹会報11号で、氏はこのバットレス行をめぐつて「自分達が自らの力で登れたことが無性にうれしく充足感で一杯になつた。」のインプ

でシングルプレイをしているとも聞き恐れをなした。

それが氏の晩年の3年間、極めて特異なお付き合いをさせていただくことになつた。事の発端は3月会で中川氏が「50年ぶりに北岳バットレスの4尾根を登りたい」と発言されたことである。

レツシブな山行がその後の登山の出発点になつた様な気がする。一橋山岳部のハイマートである北岳バットレス。できることなら一度登つてみたいと考えている」と書いた。

どこへ行くのか予想もつかない人生の起承転結は振り返つて初めておぼろげに見えてくる。そのおぼろげなものを再確認して初めて、長いストーリーを自覺的に生きたことになる。この一文はいよいよそうした確認行為を始める意思を訴えていた。

中川氏はそれまでの人生の多様な出来事の中から50年前のバットレスを自分の出発点と定め、改めてそこに戻つて人生をレビューすることにしたのだ。それを読み、中川さんは人生に関してそんな風に考える人なのかとまず驚いた。そして、新年会の席上ご本人から直接「どうか？」と問われ、酔つた勢いで「やりましょう」と答えてしまった。

ぼく自身の岩登りは40年前の甲斐駒赤石沢での遭難で止まっている。あの悲惨と滑落の恐怖はわずかな垂壁でも身をすくませ、以後本格的な登攀を試みることはなかった。それでも正面からの岩は避けながら、沢登りや雪山を続けてきた。

それが中川さんの意思に触発されて岩との付き合いを曖昧なままにしておいてはいけないだろうという気になつた。結果、中川氏の

50周年と、ぼく自身の岩への回帰の思いは一気にショートし、この短いが特異なお付き合いが始まった。

3年間のことの顛末は竹中氏の「登れずの記」（針葉樹会報所収）に詳しいので反復を避けるが、折々の中川氏の表情を辿つてみたい。

針葉樹会報でのバットレス宣言を受けて2

008年夏には4尾根隊と周辺散策隊あわせて10名規模の合宿形式で北岳に向かうことになった。

8月上旬には若手クライマー山田氏の応援を頼み、日和田山のゲレンデで最新の登攀技術の伝授を受けた。深い森の中に巨大な岩が露出し、あちこちに張られたザイルを白髪混じりのクライマーが黙々と登る異様な雰囲気のゲレンデだった。

最後にトライした3本目の壁の上端のクラックの出口で中川氏は苦戦した。クラックの向こう側にあるホールドに指が届かない。山田氏の支えるザイルを頼りに1mばかりを幾度も上下する。それが30分以上続いた。最後は山田氏と竹中氏が力を合わせて引つ張り上げた。通常であればかなり自信を失う経験だったはずだが中川氏は登れたことを良しとして明るかつた。一向に動じない姿勢にぼく

は中川氏の、ありのままの今の自分と5年前の自分を比較して見ようと言う意思を改めて感じた。

この年は8月26日から4日間をかけて北岳へ向かうことになった。丁度50年前、21歳の中川氏が4尾根を登つたと同じ時期だ。しかし、大雨のため中央線まで運休となり計画は実現しなかった。

2009年の秋には中川氏は5人の針葉樹会員と共にキリマンジャロに向かうことなりバットレスは一時おあづけとなつた。10月14日無事5700mギルマンズポイントに登頂した。氏のことだから何か特別の意思があつたのだろうと思ったが、会報115号に投稿された「回想・キリマンジャロ」の中で「キリマンジャロの雪」の映画についてふれていた。放蕩作家が愛人と共にアフリカに獣に出かけ、足に棘を刺したのが元で愛人に看取られながら死んでしまう。死後、ひからびて凍りついた一頭の豹の死体が横たわるキリマンジャロの純白の頂を目指して昇天するというストーリーだ。愛人役はエヴァ・ガードナー、当時中川氏は「こんな女性が世のなかにいるのか！」と思つたと告白している。ダンディーな氏の女性観のスタートかもしけない。その現場を確認したいとの意思是明白

だった。

そして2010年。ぼくは再度の宮仕を始め、いささか自由が利きにくくなりつつあり、4尾根についての積極性はトーンダウンしていた。しかし、新年会で中川氏にお会いすると直ちに「今年は行くぞ!」とけしかけられた。改めて、動じない意思に圧倒された。



北岳バットレスをバックに、左から本間、中川、竹中、藤原、金子  
(金子撮影)

どうしたものかと対応を先送りしている内

に三月会メンバーが思わぬ助つ人を探し出してくれた。S45卒の藤原さんで、中川氏が

バットレス宣言をした同じ会報に「還暦からの再出発」と題して、学生時代には手を染めなかつた岩登りに今やすつかりはまつてゐるとの報告をしていた。早速連絡をとると、途端に綿密な訓練メニューが提示され、奥多摩

や小川山での岩登り訓練が開始された。「そこをすいすい登れれば4尾根なんかは問題ない」そうけしかけられた。

しかし、藤原さんの指南する場所をすいすい登るのは容易ではなかつた。小川山では藤

原さんが、ごろりと転がる大きな岩の角を伝つてまるで猿のよう登つてゆく姿に呆気にとられた。地上からホンの30cmばかりの足場につま先をかけ、体重を乗せるたびに滑つて落下することを繰り返しながら中川氏は一体何と思つていたことだろう。しかし、氏は文句を言うわけではなく、ひたすらトライを続けた。比較的長い(とは言つても10mも無いのだが)ブリジッドではわずかなスタンスで足を滑らせザイルに一瞬ぶら下がりながらも登りきつた。ぼくは実に久し振りに体を宙に浮かせる岩登りの自由に感動した。

中川氏はそのあとの奥多摩での訓練にも参加し、バットレス実行が決まった。メンバーは前回からは縮小し、登攀隊4名にサポート隊1名の計5名になつた。

入山2日目の10月6日朝6時40分、bガリー下部岩壁に取り付いた。これまで3年かかつたがその間に現場観察はなかつた。50ぶりの対面を小出しにするのはためらわせいいだらうか。

学生時代登った折にはザイルも出さずにひよいひよいと登ったはずの100mの岩壁はまるで違う場所のように圧倒的だった。中川氏は「すごいなあ」と憧れを込めてつぶやいた。階段状のスタンスが続いているとは言え垂直の高度感は手足の自由な動きを封じる。おかげでのつけから慎重な岩登りとなり、4人全員が登りきるのに1時間かかった。やや遅い、そう感じるスタートだった。

草つきのトラバース道をゆくが二尾根の基部でルートが草陰に消え、ガリューを直上してしまい程なく行き詰まる。方向感覚がやや鈍っている。戻つて草陰に踏み跡を確認し、トラバースを続ける。されど道を下るとガリード。横断して対岸の草付きの中の踏み跡を辿る。途中ガリードのやや上部の大岩に赤い字でうつすらと4尾根と書いてあるのが見えた。おそらくそれが通常ルートだったのだろうが、なぜかそれは無視した。

4尾根基部に到着したのは9時。取り付きから既に2時間20分かかり、予定よりはかなり遅い。目の前にはかぶり気味の岩場がのしかかりその上は見えない。藤原登攀隊長が「行きますか?」と確認する。登攀隊長は登攀自体の統率はするが、隊としての全体行動につ

いては竹中山行隊長が指揮することになつてゐる。すかさず中川名誉隊長が「行こう」と強く宣言して行動は決まった。その意思是ひるむことが無かつた。

わずか50mのピッチだがなかなか厳しい。藤原さんがすいすいと登つた後を竹中さんが続くが、ザイルが伸びない。四角の上のクラックに登るのだがスタンスが無く体が浮いてしまう。結局登りきつたのが10時半。ぼくがそ

のあとに続き、中川さんの番になる。

上の確保点から20mほど下り、中間点から中川さんの登攀を援助した。途中で中継しないと上下のコールが聞こえない。50m一杯に伸びきつたザイルはぶら下がろうにも臨機に応じず、頼りは自分の手足だけだ。中川氏は出だしの壁で苦闘する。幾度もトライし、30分もすると腕力が消えかかつた。立つたまま

暗い壁に向かって「ちくしょう!」と声をかけている。50年前の自分はおそらくそこをすくいといつるべで登つた。今の自分はそれができない。通常であればこの憎まれ口は自分が不甲斐なさをなじる言葉だろう。しかし、そうは聞こえない。よくやつた50年前の自分に向かつての「ちくしょう」であり、自分を確認した思いに聞こえた。

この状態ではここをどうにか通過しても4尾根の登攀は時間切れになるだろう。ここまで登ってきたことを良しとし、強い意思に敬意を表しつつ、どう断念を伝えようかと迷う。「Cガリューに下つて登り直しましようか?」と声をかける。すぐに「そうしよう」と答えが返つて来る。中川氏の強い意志が現実を納得し、そして目的を達成して折り合つた瞬間だつた。

結局ぼくらの挑戦はここまで、11時15分をもつて終了した。数十年を経て突然岩に相対して全力を尽くしたがこれが限界だつた。Cガリューの登り直しも諦めた。岩とはこんなにも圧倒的ですばらしいものだつた。そうしたものに青春の日に出会えた幸運の確認と感謝。思いがけず新鮮な、冴え冴えとした思いが湧いた。

50m一杯の懸垂下降を3度繰り返して13時半に下部岩壁下に無事辿りついた。スタートして既に9時間がたつていた。途中ザイルにつかまつて下りながら垂壁の見事さに見ほれた。こんな壁をとにかく登つたんだと言う満足もあつた。中川氏もそんな思いを持ちながらガスに巻かれた垂壁を降りたに違ひない。

その10日後、マツチ箱上部を中心とした岩壁帯が大崩壊し、1年後の今でもバットレス

は立ち入り禁止となつてゐる。一体何が起つたのか？中川氏の最後の挑戦のあと、現場そのものが永遠に封印されてしまつたのだ。

そしてそれからわざか半年、思いもかけず中川氏は昇天された。キリマンジャロの西面ルートをたどり、豹の尾やエヴァ・ガードナー

に出会つてゐるのかも知れない。振り返つてみればこの3年の間に氏は終焉のための準備を精力的に展開し、その全てを見事にやり終えた。人生を自覚的に生きようという不動の意思。最後にその姿勢を存分に拝見させていたいたことを深く感謝し、ご冥福を祈りたい。

## 同期の仲間から

### 死の美学を貫いた中川

石 弘光（昭36年卒）

告げねばならないのは、まさにやりきれぬ思いで一杯である。

われわれヤロー会のメンバーは、ここ十数年来、定期的に年2回の集いをもつてゐる。一つは、車椅子になつてしまつた小林正直を山へ連れ出し、遠くからでも昔登つた山の思い出に浸りたいという、永井が幹事役の一泊旅行である。そしてもう一つが、暮れの忘年会で万年幹事の有賀が毎年仕切つてくれている。皆、奥さん連れて参加するルールがいつの間にか出来上がつてゐた。

中川もいつも元気に参加してくれていた。二の3人を含めると、ヤロー会の半数が鬼籍に入ったことになる。1957年の入学と同時に、山岳部に入部し新入生歓迎コンペ以来半世紀以上にわたる仲間とこう次々と別れを

われの前に披露してくれていた。中川も痛風を気にしてビールこそ控えていたが、紹興酒などうまさうにのみかつ中華料理にも健啖振りを發揮していた。たまたま私の家内が中川の隣の席で、共に近況報告など交わしていた。

われわれの世代になると、当然話題の中心は健康談義になる。まして数人、癌患者がおり癌の話しもあちこちに飛び交つてゐた。内が中川に、身体の悪いところは無いかとたずねた折、まったく健康上問題ないと返事だつたのこと。彼は健康の話にはまつたく乗つてこず、もつぱら最近試みた北岳バットレスの登攀断念をいかにも残念そうにしゃべつたのが印象的であった。

その彼はまさに仲間の誰にも告げずに、長年癌と獨り闘つてゐたのだ。2月に彼が腹痛で入院しているという話が伝わつてきた。軽い腸捻転ぐらいだろうと、われわれは皆、気にも留めなかつたはずである。それなのに、次の連絡は突然の訃報であつた。後でいろいろ聞くと、大腸がんか直腸がんでもう末期で手の打ちようも無かつたらしい。

学生時代から寝食を共にした昔の山仲間の誰にも告げずに、彼は独り旅立つたのだ。病のことは、他人に語つても分かつてもらえない。かえつて心配をさせるだけだと、独りで死を迎えるといと、彼らしい「死の美学」を貫

いたようだ。若いころより神経の太い男だったが、彼だから出来たことなのだろう。どんな死に方をするのかは、ひと様々である。中川のように自分の死病を親友にも明かさず、最後まで独りで胸に秘めておくのは相当の覚悟と信念がないとできない話である。いかにも中川らしい。

中川は、山岳部のリーダーであつたし、またわれわれのヤロー会のまとめ役でもあつた。一癖も、ふた癖もある10人の仲間を、仕切るのはさぞ大変だったと思う。おそらく仲間のうちで、高校時代から山岳部に属し山の経験が最も深く、また山をもつと愛したのは、中川であつたろう。だからこそ70歳を超しても岩登りに執着し、北岳バットレスを目指し、自分に最後のチャレンジを課したのだろうと思う。

現役時代、不思議と彼とはあまり合宿で一緒に登った記憶は無い。確か彼とザイルを結んだことも無かつたと思う。しかし彼とは、私の生涯で最も楽しい山旅を送ることができたのだ。大学4年生の秋、将来の進路も決まりほつとした時期に、2人で個人山行として、槍の北鎌尾根を目指したことがある。

このときの思い出を、その後朝日新聞が企画した「日本百名山」の特集に執筆してある。これは百名山特集の各々に誰かが思い出の

エッセイを書くという企画であり、私に依頼があつたときに躊躇なく槍ヶ岳を書かせてくれと申し出たものである。以下、その一部を引用する。いうまでもなく、文中のNは中川のことである。

「槍ヶ岳で、最も楽しかった山行は大学4年生の秋、仲間のNと北鎌尾根をつめたときであつた。前日に信州側から入り葛温泉から高瀬川沿いに丸一日歩き、千天の出会いでツエルト（簡易テント）をかぶつて寝た。翌日、山々は紅葉の始まり、藍に染まるかと思われるほどの青空に恵まれ、その中を仲間2人だけの北鎌尾根の岩稜歩きを楽しんだ。

生涯記憶に残る山はと問われれば、間違

なくこのNとの北鎌尾根の山旅を挙げたい。

一般ルートのちょうど真後ろから、ザイルをまいてひょっこりと頂上に姿を見せたときに、一般的の登山者が目をまるくしていたのが面白かった」

（『週刊日本百名山』 槍ヶ岳 第8号、2001年3月18日 朝日新聞社）

このエッセイは、中川のことを生涯、私の心中で思い出すものとなつてゐる。

（夏の暑い盛りに、大町エコノミスト村で、

2011年8月記）

## 中川滋夫（アンリー）と私

永井 新也（昭36年卒）

大学を卒業してからシンガポールで再会するまで、アンリーとはあまり会つた記憶がない。彼はシンガポールから帰国した後も、ヤロー会の会合にはあまり顔を出さず、他の人たちと山へ登つていたようだ。

去年暮れ丸ビルで開いたヤロー会忘年会には元気に顔を出してみんなと談笑していた。まさか、その後まもなく入院するとは思わなかつた。落ち着いたら見舞いに行こうなどとヤロー会員たちと話しているうちに3月25日訃報が倉知さんから入つてきた。山本尚楨君が亡くなつたばかりだったので、私には大きな衝撃でした。奥様のお話では、彼は去年の暮れからゴルフや会合にはよく出ていたそうで、本人はある程度覚悟ができていたのは、という気がする。

アンリーはゴルフが大好きで、おしゃれで、白いハンドティングをかぶり、ダンディな姿は一見山男よりゴルファーのようでした。山では

何にもへこたれない強靭な身体を持ち、病気など受けつないと思われたのに、病で斃れるとは。

彼は高校時代から山岳部にてあちこちの山へ登っていたそうで、山では常に冷静、沈着で、困難に対してもへこたれることなく、その豊富な経験と知識、技術を生かして、チーフリーダーとして山岳部員を指導してくれた。

昭和34年剣岳合宿では彼とパートイを組み、源次郎二峰A Bフェイスに取り付いた。トップは無論彼だが、最初の岩壁でハーケンを打つたりして少し時間がかかったがこれを過ぎると上部の木立の陰に見えなくなつた。さて、小生の番だ。取り付いてびっくりしたのは、多くの人たちが登っているコースなので、岩の突起が丸くなつて滑つつかめない。アンリーがザイルで確保していくれているので落ちることはない、と指と膝と足とでこの難所を乗り越えた。

更に尾根に出でしばらく行くと、アップザイレンで降りる処に出た。ここには何パートイか順番待ちをしていて、我々も一時間半位待たされた。空は快晴、カンカン照りで周りは這い松、逃げ場がない。現場を降りて尾根を頂上まで詰めてテントへもどつたが、小生は半分熱射病でふらふらしていた。アン

リーは全く正常で格の違いを感じさせられた。

昭和35年夏合宿は涸沢で彼がチーフリーダーで行われた。私は就職試験で数日遅れて参加した。翌日縦走が始まつた。理由は忘れたが4年生の縦走参加は4名位だったと思う。中尾峠を越えて、3日目は今回の縦走の目玉である笠ヶ岳2000mの登りである。

みんなが良く頑張つて一人の落後者もなく頂上についたが、ものすごい雨で、1年生あたりから小屋に泊まりたいとの声も出でていたようだが、中川リーダーの指示で、疲れた体に鞭打つてテントを張り、厳しさを体得したようだ。

平成12年アンリーに招待され、シンガポールヘゴルフと観光を兼ねて故小林進二、三股、遠藤、小生とで出掛けた。彼は一緒にゴルフをしたり、工場案内、シンガポール市内案内、夜の宴会など心のこもつたもてなしをしてくれ、楽しい、懐かしい思い出になつてている。

平成14年ヤロー会仙丈岳登山ではラストを歩いてまとめ役を担い、平成21年の針葉樹文庫開設に先立つて行われた夜叉神峠登山では膝関節症の痛みをこらえて下る小生の直ぐ後ろにいて、私を励ましてくれた。

私にとってアンリーは目に見えないザイルで私をサポートしてくれる温かい存在だった。私にとってアンリーは目に見えないザイルで私をサポートしてくれる温かい存在だった。アンリーは全く正常で格の違いを感じさせられた。アンリー・中川の思い出  
三股 宏（昭36年卒）

丁度1ヶ月前、山本ショーティが突然死し、この時も永井より連絡をもらつたが、先約があり告別式に出席できないので、中川に香典を託すべく電話したところ、入院中とのことで永井に依頼した。すぐそのあと中川より電話が入り、「何だ」というので「ショーティの件だ」というと、まだ連絡が行つていなかつたらしく、「死んだ」というと、しばらく声がなく、「永井に言つてヤロー会の花輪をださ

と思えてならない。アンリー ありがとうございます。  
心からご冥福を祈ります。

2010年12月11日（土）の昼食会には、大阪で如水会のイベントが重なり、出席できなかつた。

2011年の針葉樹会の新年会が1月27日（木）にあつたので、みんなの顔が見たくて、卒業後、初めて出席したが、会えたのは仲田だけで、あとで聞いたらアンリもショーティも入院していたとのことだつた。

ヤロー会では、本名のほかに呼び名があり、

中川の呼び名はアンリだつた。

小生は、2年より山岳部に入ったので、誰



中川氏が社長をしていたインドネシアの工場にて。  
左から、永井、小林、三股、中川、遠藤。

がアンリとなづけたのか詳しく述べる。どうも大賀ではないかという気もするが、彼がフランス語を専攻していたのと、かれの雰囲気から、この名がついたと聞いている。ヤロー会の連中のなかで、雰囲気を良くあらわしている呼び名は、永井の村長、小林（進）のギューチャン、中島のPIRATEといったところで、あとは名前に関したものが多い。

中川は、4年になり山岳部のリーダーになつたが、冷静なリーダーであつたと思う。

なぜか、ザイルを組んだ記憶はあまりないが、それまでの中央線での降車駅が高円寺、中野と近かつたこともあり、部会などのかえりに、阿佐ヶ谷のバーでよく飲んで帰つたのを覚えている。当時は、トリス・バー、ニッカ・バー全盛の時代で、安く飲めた時代だつたと思う。

ヤロー会では、毎年12月に忘年会をやつてゐる。このところ、ずっと出席していたが、

われわれヤロー会は、今から50年（半世紀）前の、1961年3月に卒業したが、中川と小生は、伊藤忠商事（株）に入社した。

彼は、1961年4月から11月まで、ペルーおよびボリビア、アンデス遠征に加わつたので、正式入社は12月1日である。この遠征では、8月3日にネバK N Kに登頂した。

同じ会社のよしみで彼の伊藤忠時代の経歴を紹介しよう。

彼は、1961年12月に、東京の鉄鋼部門に入社した。

海外経験は、1968年より北米ロスアンゼルス支店に5年半、1977年北米ヒューストン支店アトランタ駐在より事務所長となり5年半、1991年タイ田淵電機に出向し、3年半バンコックに駐在、1994年11月シンガポールGSS（田淵電機子会社）社長となつた。工場がパダム島（インドネシア）にあつた。1997年3月在任のまま、伊藤忠商事定年退社。2001年3月まで勤めて退職した。

北米駐在中には、ア巴拉チヤ山脈の山々、シンガポール駐在中には東南アジア最高峰キナバル山に登頂したと聞いている。国内の勤務は、東京に終始した。

一方、小生は1961年3月東京織維部門に入社した。1965年から1970年の5

年間、新潟支店勤務、海外勤務は、1973年からソウルに4年間、1982年からコロンボ（スリランカ）に5年間、あとは大阪での勤務だった。1997年3月定年退社した。

伊藤忠時代のアンリとの接触は、新潟時代に支店に寄ってくれたのが1回、また彼が、アトランタの所長時代に、マスターズの入場タグを送つてくれたことがあったが、訪問のチャンスはなかった。その他、数回、接触の機会はあったと思うが、くわしくは覚えていない。

一番楽しい思い出は、彼が伊藤忠退職後のGSSの社長時代で、退職の直前、ヤロー会・クロ一會にシンガポールに来るよう、いつてくれたことがあった。

2000年8月27日（日）から31日（土）にかけて、小林ギューやん、永井村長、遠藤（クロ一會）、三股の4人で訪問した。

8月27日（日） 東京、大阪よりそれぞれシンガポールに集合。

8月28日（月） バード・パーク、セントー

サ観光後、アンリと夕食を楽しんだ。

8月29日（火） パダム島（インドネシア）でゴルフ、彼の工場を見学した。

8月30日（水） シンガポールカントリークラブでゴルフ。

8月31日（木） シンガポールより東京、大

阪にそれぞれ帰国。

ゴルフのスコアは、ギューやんが一番よく、アンリと三股は同じ程度、遠藤さんのスコアは残念ながら覚えていない。永井はプレーしなかった。まだ元気だったアンリ、ギューやんと楽しくプレーしたことがなつかしく思い出される。

小生は、2001年4月より現役復帰し、

2006年6月まで勤務したが、この間、2005年にギューやんが死んだ。ギューやんが死ぬまでは、ギューやんの故郷に近い伊保やアンリが会員となっている青梅ゴルフでアンリ、ギューやん、三股の3人に加え、時にクロ一會の遠藤、三井を加え、プレーを楽しんだことが思い出される。

ギューやんのいなくなつた2006年以来は、少なくとも年1回はアンリとプレーしていくが、2010年はなぜかゴルフをやることも、会うこともなかつたのが残念思われる。中川君、安らかに眠つてください。

「ねー、中川さん」と70過ぎの老人が甘える。「入学の時に一年先輩だと、一生、一年先輩ですね」と遠藤。中川さんはいつも通り、泰然自若として答える。「しゃーねえじやないか」。こんな会話を平気で出来るほど中川さんは私にとって一番身近な「先輩」だった。今回の中川さんとの早すぎる別れも、「しゃーねえ」ことなのだろうか。

中川さんは私の一年上のリーダーだったが、山での付き合いの思い出より、卒業後のゴルフでの付き合いが長く、且つ、親密だった。

三股さんが上京してきたとか、小林進二さんとプレーをするとか、いろいろな機会に誘つてくれた。シンガポールへ赴任する時も送別ゴルフをしたし、その縁か、シンガポールにも呼んでくれた。現地では、フォアキャディーつきの名門コースから、キヤディーが

「もつと一緒に遊んでいたかった！」

遠藤 晶土（昭37年卒）

ティーマークさえ大事にする田舎のゴルフ場まで、昼夜を問わず案内をしていただき、大いにシンガポールを楽しませてもらった。

中川さんのゴルフの腕前は、山同様、ヘボな私などの数段上だった。中川さんは、シンガポールから帰国後、本腰を入れてゴルフに取り組み始めた。日本でのホームコースを選ぶ時、一応、私のホームコースも候補に挙げてもらつたが、結局、名門青梅ゴルフ俱楽部に入会した。私の同期のゴルフ狂も数人、青梅のメンバーだった。「青梅如水会」のコンペで数回中川さんと一緒にプレーをしたそのうちの一人が「彼は、オレが今まで廻った中で最高のプレーヤーだ」と、私に電話をかけてきた。

私は中川さんを人に紹介するたびに、中川さんに名刺を出すことを強要した。その名刺の肩書き「青梅ゴルフ俱楽部 フェロシップエチケット委員」はそれだけで中川さんのゴルフの腕前とマナーの良さを十二分に物語つている。私は、受け取った人の反応よりも、その名刺を取り出すときの、淡淡としてさりげない中川さんを見るのが好きだったので。

山もゴルフも半人前の私に中川さんは不思議に目をかけてくれた。キリマンジャロ登頂の話が出たとき、「エンドウが行くのなら、俺

ンである。

無事、キリマンジャロを登攀して、我々6人はアフリカのサファリを楽しんだ。



インドネシアのゴルフ場で。  
左から、三股宏、中川滋夫、永井新也、遠藤晶土、小林進二。

が面倒をみなければならないな」と言つて、参加を決めたと人づてに聞いた。キリマンジャロ登頂後、頂上直下の一休みの時、中川さんは自分のザックからおもむろにザイルを取り出し「最後は、これでエンドウを引っ張りあげる積りだった」と宣われた。その重量感あるザイルとカラビナを見たとき「エンドウの面倒を見る」と云つたのは、決してリップサービスではないと知つた。私にとつては、今、思い出すと胸が熱くなる言葉であり、シ

ンなどのミニアツクなテーマまで、お互いカードを切りあい、二時間以上、昼食の為に車が停まるまで話は尽きることがなかつた。

そういうえば、私の友人の素人芝居にも快く付き合つてもらつた。知人のクラシック音楽会のチケットも買ってもらつた。音楽会での中川さんの片言隻語をかきあつめてみると、もし、聞き手に人を得れば中川さんはクラシック音楽に関しても相当な造詣の深さを持つていると紹介できただろうと残念だ。

いま、改めて思い出せば、ここ数十年、中川さんは山にも結構一緒に登っている。今はなき小林進一さんや大建一郎君（同期だから「さん」ではないのです）と一緒に男体山や知床などにも足をのばしている。しかし、同期の三井君を交えたこれらの山行の想い出は、「山」よりも登山後にある。中川さんとのこれらの山行では、登山前後には必ずゴルフをし、宿ではカラオケを楽しむのが定番の行事であった。森進一やフランク永井の歌の数々をマイクを廻しながら唄つた夜を、もう、二度と再現できないのだ。

あー、中川さん！　何故、そんなに急いだのか！　もつと、一緒に遊んでいたかったよー！

## キリマンジャロのマサイ

ナイロビ・大賀敏子

マサイはアフリカ最高峰キリマンジャロ山周辺に住む先住民で、その数は二〇～三〇万人と推定される。放牧地を求めて一族郎党移動を続ける遊牧民で、牛、ヤギなどの家畜が生活の糧であり社会経済の基礎でもある。トウモロコシ、小麦粉などは援助物資が入れば食べることもあるが、伝統的な常食は家畜の乳と血だ。すらりとした肢体を、首飾り、腕輪、イアリング、髪飾りで巧みに飾る姿から

サバンナの貴族と呼ばれる。

古くは英國植民者に、独立後は農耕民族に土地を追われ、たとえば現ケニア政府も定住化を進めようとしているが、伝統に忠実であろうとする誇りは高く、農耕を受け入れない者も多い。移動した先々で主婦が泥と牛糞で家を建て、子供を育てる。赤い布をまとった男性は、外敵から家族と家畜を守るために槍を

手放さない戦士だが、むやみに戦っているわけではない。以前私がケニア南部のサバンナで車の事故にあり、救援を待っていた時、頼んでもいないのに、暗くなつてもその場を離れず見守つてくれたのは、付近に住むマサイ青年たちだった。

中川滋夫さんは、キリマンジャロ登山のため、はるか日本からやってきた如水会六人チームのリーダーだった。ケニアから陸路タンザニアに向かう忙しい日程をやりくりして、如水会ナイロビ支部とひとときを過ごしたのが楽しい思い出だ。

中川さんはどんな絶壁にも果敢に臨む登山家で、さらにゴルフも一流だったそうだが、私にとっては、メンバーの中でいちばん寡黙で、ときおり本質的なことだけばつとおつしやる、厳しい人だった。

そんな中川さんをしのぶとき、大きな空を背にしたサバンナで、戦士の証である杖を肩に悠然と立つマサイの雄姿を重ねている。

## 将来のクライミング・パラダイス

では代表的な花崗岩のピークの写真を示しその将来性を想像して頂こう。

### アルパイン・パラダイス

#### —四川省・理塘高原へ

##### 沙魯里山系ピーグ同定

中村 保（昭33年卒）

雲南北西、怒江流域のキリスト教会探訪を終えて、四川西部高地踏査のため2010年7月19日に昆明から成都に移動した。2週間かけて巴塘の東、未踏のヤンモーロン6060m北東の知られざる5700—5900m山塊の探査と馬のキャラバンで理塘高原横断を計画したが予定通りには行かなかつた。しかし、理塘高原・沙魯里山山系のピーグ同定と未踏峰の確認の材料を持ち帰ることができた。と同時に、辺境の急速な発展、開発がもたらす矛盾、東チベット圏の目に見えないセンシティブで不安定な状況と直に向き合うことできた。旅程を迎る前に、強く印象に残つたことを記しておきたい。

四川省阿霸州の四姑娘山を擁するチヨンライ山系の5500m前後の花崗岩の岩峰群には交通の便がよいこともあるて、今や世界的にも有名になり内外のクライマーが押し寄せ賑わっている。日本のクライマーもチャレンジしている。事故は頻繁に発生している。2010年9月には残り少ない未踏峰の顕著な岩峰・野人峰5592mをアメリカ隊が初登頂し『ヒマラヤ』456号)、山梨岳連隊は岩峰・牛心山4942mに新ルートの東南壁から登頂した。

チヨンライ山系の次に期待されるクライミング・フィールドは理塘高原・沙魯里山山系のゲニ(ゲニ峰Genyen)山塊の岩峰群であろう。主峰のゲニ6204mは1988年に日本ヒマラヤ協会隊が初登頂、ゲニ峰北西の鋭峰5956mは2010年10月にチベットのラブチエ・カン( Labuché Kang) 7367mで遭難死したアメリカのジョー・ブルハイアード(Puryear)が2007年に初登頂以降、この広範な山塊の5500—5900mのピークは全て手付かずで残されている。その中でゲニ峰周辺の花崗岩の岩峰群は近い将来、チヨンライ山系のようにクライミング・パラダイスとして脚光を浴びるだろう。こ

### 理塘高原—沙魯里山 2010夏

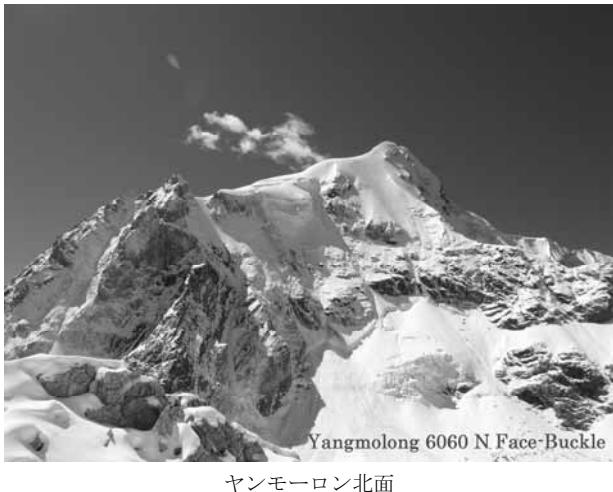
雲南では異常気象の水害に災いされたが、四川西部高地の天候は比較的安定していて、豪雨による道路の遮断もなかつた。計画挫折の原因は、目的の谷は外国人には閉ざされていたこと、遊牧民の協力が得られなかつたこと、そんな状況のなかでも粘つて交渉するという執念が薄らいでしまつたことだろう。老年探検隊のボルテージは下がつてきたようだ。もうそろそろ辺境のオデッセーは終りにしようかと、永井さんとしみじみ語つた。

### 成都にて、大川健三さん

7月19日、昆明から成都に移動する。相棒の永井剛さんが来るまで1週間成都に滞在する。四川大地探査の張繼躍と世界文化遺産の樂山大仏を見に行つたり、雲南紀行を書いたりして時間を潰す。その間に経験したこと、見聞きしたことを幾つか記そう。四川でも大雨の被害は起つており、大渡河上流の大金川で路線バスが川に転落、乗客36名中20数名が車体もろとも川に流れ行方不明になつたことを記しておきたい。

た。四川大地探検は今年（2010年）は繁盛している。アルパイン・ツアーやタイアップして四姑娘山とミニヤ・コンカのトレッキングに多くのグループを送り込んでいる。

大川健三さんのドキュメントが企画されていたが、中止となつた。理解できない理由であるが、日本で放映された場合の中国側のリアクションが大川さんにおよぶことを懸念して止めたという。大川さんによる（テレビ取材に関連して）中国当局は、外国のテレ



ヤンモーロン北面

ビ会社が取材し外国で商売することを好まず、中国自身で取材、作品を作つて外国に売りたいと考えているので、外国メディアの取材を制限している。大川さんの四姑娘山の美しい写真集「蜀山女神」は、1冊目は100

00部刷つて完売、コスト100万円、2冊目は5000部でほぼ完売、コスト120万円、3冊目は2年後に出版される。この素晴らしい本は外国でも評判である。私は海外の多くの山岳会や友人に送り、またブック・フェアにも展示している。丹巴から成都に出てきた大川さんと張少宏もいれ民族飯店の専門店で中国牛のしゃぶしゃぶを食べる。中国の牛肉は食指をそそらないが、このしゃぶしゃぶは期待以上に美味かった。

中国のテレビは抗日戦争の反日映画を頻繁に放映しているが、期せずしてビルマ・雲南を結ぶ援蔣ルート攻防のドキュメンタリーをテレビで見た。重慶政府救援のためミャンマー・チベット・雲南国境の「ハンブ（駱駝の瘤の意）横断山脈を越えて物資を輸送する連合軍飛行機の映像も出てきた。数日前に雲南の保山空港に展示されている写真を見ただけに印象的だった。いつものように新華書店を覗いてみる。興味を惹く新しいチベット関係の本は見当たらなかつたが、中国の本の出版の急増に驚く。「徳川家康」など日本の翻訳

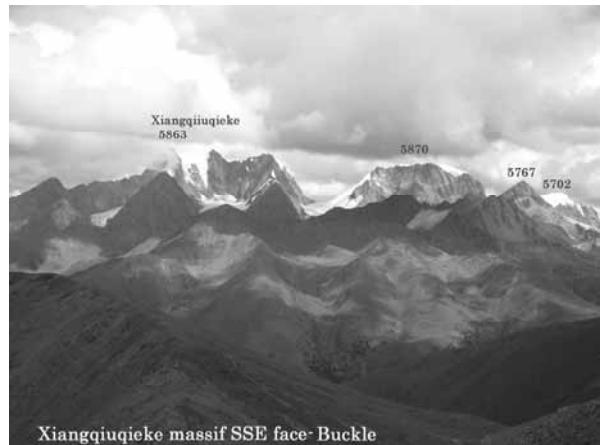
も多い。家康の戦略・策略を学ぼうというのだろうか。

## 西部四川高地・理塘高原へ

探査の当初の計画は巴塘とヤンモーロン山塊の北東、川藏公路南側の相丘切克 $5863\text{m}$  (Xiangqiuqieke) 山塊解明と理塘高原中心部を横断することであつた。相丘切克山塊は2005年に山梨県岳連傘下の隊が川藏公路から北面にアプローチし、天気には恵まれなかつたが、不鮮明ではあるが氷河湖越しに北面のパノラマ写真を撮つた。また2009年の英国ヤンモーロン登山隊は南東面のパノラマ写真を撮つている。1999年、私と永井さんがラマヤから巴塘へ旧街道を馬のキヤラバンでトレイスした時に南面の二つのピークを谷筋から写真に収めた。私の知る限り記録はこれだけで、登山や本格的な偵察をした隊は寡聞にして知らない。全て未踏峰である。2011年の秋にニュージーランドの女性隊が相丘切克に挑む。

ヤンモーロンに関しては最後の章で詳しく書きたい。

我々の計画では巴塘の付近から山塊北面の大気な氷河湖・措納合措 (Cuonahhecuo) への谷に入り、北面を先ず偵察し、その後南面を



シアンチュウチエカ山群

探査し東に向つてキヤラバンをして5000mの峠を越え、さらに哈嘎拉（4784m）を越えて理塘高原中央部を横断するかなり欲張ったアイデアだった。しかし目論見は外れた。

7月27日、成都を出発する。メンバーは永井さんと私の他次の3名である。ガイド＝パン・ヤユ 47歳、コック＝ツォン・ジンビン 41歳、運転手＝ワン・ヨンリヤン 43歳である。パンさんは日本に留学経験があり日本語

はほぼ完璧、重慶に住む。四川大地探検の日本担当のペテランで日本人の評判はそこぶる良い。みなみ・らんぼうや関野吉晴の案内もしている。ただ漢族であるため奥地のチベット族との交渉は得手ではなく、神経を使う東チベット辺境の踏査の水先案内には不向きと思う。チベットの踏査はチベット族のガイドを使うべし、という大探検家F・M・ベイリーなど往時の英國探検家の教訓は今でも生きている。コックのツォンさんは2009年の英國ヤンモーロン隊にコックとして参加しているので、巴塘近辺の谷とチベット族についてある程度知っているが、今回は彼の経験は役立たなかつた。

成都から東チベットの玄関口、康定まで7時間、折多山峠（4298m）を越え新都橋を通過して雅龍江の辺の雅江（2680m）まで長躯520kmのドライブで足を延ばす。標高の高い理塘（4015m）に泊まらないためだ。雨季にもかかわらず川藏公路の道路はよい。何十組もの大学生がマウンテン・ハイクで西に向かつてペダルを漕いでいる。成都から25日かけて目的地のラツサに着くといふ。現代の巡礼だ。

7月28日、夏の理塘高原の緑は鮮やかで美しい。東チベット高原のなかでの最も肥沃な高原で水利がよくヤクや馬の飼育に最適の場

所の一つで、勇猛果敢なカンバ族の遊牧民が住む。毎年8月1日には有名な「理塘馬祭り」が開催され、外国からも多くの観光客が来る。しかし、今年は突然中止になつた。理由は政治的というだけで、誰も説明してくれない。カンバ族の抵抗による不穏な状況があるのかかもしれない。

雅江を出発し剪子湾峠（4659m）、卡子拉峠（4718m）を過ぎ理塘に着く。途中沢山の青いケシの花（ブルー・ポピー）を見る。天気は安定している。舗装された川藏公路を西へひた走り海子山峠（4685m）を越えると正面に城砦のような夏塞5833mとトルコ石色の氷河湖が現れる。展望台で自転車の学生グループと記念撮影をする。日本から来たのかと英語で話しかけてくる。明るくてタフな若者だ。公路は下り一方で巴塘に向けて2000m下る。五つの新トンネルができ、時間は著しく短縮されるようになつた。

相丘切克とヤンモーロンへのアプローチとしては海子山峠の少し東の①と峠から南西に巴塘に下る川藏公路から入る②～⑤の五つの谷がある。チベット族の性格や外国人に対する対応は谷により違うことを知つておくべきである。北から順に記す。

①牧民定居点から南への谷——相丘切克北面へ

|| 外国人のアクセスには問題ない。2005年の山梨隊はこのルートで山塊に接近した。

② 336工班から打日隆谷—相丘切克南北両面へ || 村人は排他的で、村長の威令が届かない。粗野で危険である。外国人は入らない方がよいと郷の副書記長のアドバイスがあった。

③ 336工班と党巴の間、桑曲谷・桑隆西—ヤンモーロン北面へ || 地形的には最適であるが、最も危険な谷で、2009英國隊はベース・キャンプの物資が留守中に全部盗難に遭った。馬とバイクの調達でも法外な要求をされトラブル続出だった。以後、巴塘県当局はトラブルを避けるために外国人がこの谷に入ることを禁止している。英國隊の後は、ドイツ隊もアメリカ中国隊も村人に追い返され南面ヘルート変更を余儀なくされた。村人に「外国人がくると天変地異が起こる」と恐れられたという。数年前に英國隊はゴンカラ山系の主峰カワラニ 992 m（未踏）で付近のラマ僧から同じ理由で追い返されたケースもあった。

④ 党巴から東／東の谷へ—ヤンモーロン北面へ || ここチベット族は友好的で協力的である。2010年秋に早稲田大学山岳部学生隊がヤンモーロン山塊の未踏の 5850

m 峰偵察のために入った。同時にアメリカ中国合同隊はヤンモーロン主峰を狙つてこの谷から峠を越えて北面に入った。

⑤ 党巴から東／南東の谷へ（沖覇経由）—ヤンモーロン南面へ || 村人は協力的で入山は問題ない。2000年6月に中村・永井は初めてこのルートで入りヤンモーロン南面を偵察した。以後、党結真拉 5833 m を初登頂した横断研京都隊など幾つものパーティーが入つていて問題を起こしていなきない。

谷によつて同じカンバであるチベット族の反応がかくも異なるのは何故か、全く理解できない。

聞かせて対応策を思案する。お金のかかる東チベット圏の踏査行から手ぶらで帰るわけにはゆかないで、いつも幾つかの代案を用意して行く。今回は理塘高原とその周辺の山域の地図を全て持参した。打日隆谷へ入り相丘切克山塊の南北両面を偵察することができなくなつたので、川藏公路を海子山峠まで戻り、牧民定居点の新しくできたラマ僧院から尾根沿いに上つて相丘切克 5863 m の北面を写真に収めた後、東隣りの谷から南下して理塘高原を馬で横断しようと考えた。

7月29日、巴塘を発つて川藏公路を戻る。雨季にもかかわらず晴れていて天気は安定している。ラマ僧院から三時間かけて 4700 m 地点まで登り相丘切克 5863 m の北面の写真を撮ることができたが、天気が急変し突然に雹、霧、強風、雷鳴に見舞われ、下手をすれば凍死の危険もあつた。夏山の恐ろしさを体験した。この日は理塘まで行き泊まる。

7月30日、理塘から川藏公路を西に戻りながら南側に時々姿を現すピークを丹念に追つてドライブし川藏公路を離れて 7 km 南の禾然色巴村（4310 m）に着く。ここを横断トレッキングの起点と考えた。

横断研の中島さんたちが2010年の5月に禾然色巴村から哈嘎拉近くまで車で往復しているので、我われは馬のキャラバンで理塘



Genyen (5873m) 東面

二山塊周遊、2000年ヤンモーロン踏査の写真とチエコの登山家のゲニ峰山塊の写真が役立つ。幸い禾金色巴村から二つの顕著なピーク、アサ(Asa)とベリ(Hari)が近くに見える。アシヤゴンゲ(Ashigongge)も遠望できる。山の写真を撮り位置を測定し理塘に戻った。

7月31日、朝は晴れていたが曇りだす。理塘高原を車で北から南に縦断すべく再び川蔵行路を西に向かい、禾尼(ホニ)から格則、ラマヤに通じる道に入ろうしたが、橋が落ちていて車は通行不能、仕方なくまた理塘に引き返し、ラマヤへの旧道を行く。1999年には極端な悪路で理塘から西に向かつてラマヤまでのドライブに10時間かかったが、今は舗装こそされてはいないが道はよく整備され僅か3時間で着いた。途中の鍛冶屋三兄弟の峠(4830m)を少し下ったあたりからケニ峰山塊東面の大パノラマが南北に展開する。写真日和ではないが、チャンスを窺つた。ラマヤに1泊して8月1日に理塘に戻った。

ゲニ峰6204mは1987年に日本ヒマラヤ協会隊により南面から初登頂された。数年前にイタリア隊が東壁の新ルートから第二登、その後アメリカの有名なクライマー、チャーリー・ファウラーとクリストフ・ボスコフが遭難死し話題を擲いた。ゲニ峰北側に

ゲニ峰初登頂、私と永井さんの1999年ゲ

二山塊周遊、2000年ヤンモーロン踏査の写真とチエコの登山家のゲニ峰山塊の写真が役立つ。幸い禾金色巴村から二つの顕著なピーク、アサ(Asa)とベリ(Hari)が近くに見える。アシヤゴンゲ(Ashigongge)も遠望できる。山の写真を撮り位置を測定し理塘に戻った。

7月31日、朝は晴れていたが曇りだす。理塘高原を車で北から南に縦断すべく再び川蔵行路を西に向かい、禾尼(ホニ)から格則、ラマヤに通じる道に入ろうしたが、橋が落ちていて車は通行不能、仕方なくまた理塘に引き返し、ラマヤへの旧道を行く。1999年には極端な悪路で理塘から西に向かつてラマヤまでのドライブに10時間かかったが、今は舗装こそされてはいないが道はよく整備され僅か3時間で着いた。途中の鍛冶屋三兄弟の峠(4830m)を少し下ったあたりからケニ峰山塊東面の大パノラマが南北に展開する。写真日和ではないが、チャンスを窺つた。ラマヤに1泊して8月1日に理塘に戻った。

ゲニ峰6204mは1987年に日本ヒマラヤ協会隊により南面から初登頂された。数年前にイタリア隊が東壁の新ルートから第二登、その後アメリカの有名なクライマー、チャーリー・ファウラーとクリストフ・ボスコフが遭難死し話題を擲いた。ゲニ峰北側に

は冷谷寺(乃谷根巴)谷を囲繞する5500m5900mクラスの際立つた岩峰が綺羅星の「」とく連なっている。まさにアルバイン・パラダイスである。

クライマーにとつて垂涎の知られざる岩峰群が眠つている。これらのピーク同定の写真と地図を世界に発信したところ多くの反応があつた。クリス・ボニントンのメールを原文で紹介する。アメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長のジョン・ハーリンⅢはアメリカのクライマーらしく壁の高さと岩の種類を訊いていた。

*Tom, A belated thanks for your wonderful information on all those peaks and fascinating areas. The thoroughness of your exploration and reportage is truly magnificent. Very best wishes, Chris Bonington*

ゲニ峰山塊へのアクセスはそう不便ではない。遠くない将来、四姑娘山のチョンライ山系の岩峰群のようにクライマーが押しかけてきて賑わうだろう。

ゲニ峰の北東、冷谷寺(乃谷根巴)の谷周辺だけでなく、その北側にも半ば隠れたピークも多い。1999年秋に永井さんとゲニ峰のピーグの同定をしよう方針を変え早速行動に移した。日本ヒマラヤ協会の1998年ゲニ峰初登頂、私と永井さんの1999年ゲニ峰北側に

北西のピークをも紹介する。

### 央莫龍ヤンモーロン山塊

#### 一難攻不落の主峰 6060m

ヤンモーロン山塊において登山と踏査が始まつたのは1991年になつてからである。クロニクルを概略記す。

1991年＝日本大学工学部の北桜会が北面から主峰6060mに挑んだ。佐藤彰隊長以下9名。10月22日BC(4200m)、悪天候と雪崩の危険のため5450m地点で退却した。

2000年＝6月に中村、永井が初めて南面を偵察した。

2002年＝6月に横断山脈研究会・京都隊が党結真拉5833mを初登頂。ルートは南面からで中央氷河を登り、中央峰6033m(Makara)とのコルから東稜経由で頂上に立つた。

2003年＝韓国隊が中央峰6033m(Makara)を中心氷河からコルにて西稜経由のルートで初登頂したとの情報があるが未確認。アメリカン・アルパイン・ジャーナルに載つた記事に疑問を呈する向きもある。四川登山協会に問合せるも返事がない。西稜はサミット・リッジが急峻な岩稜に

なつており登攀は困難だろうとアメリカ隊の見方である。

2007年＝5月に中国隊3名が日本隊と同じルートで党結真拉5833mを第2登、しかし、登頂後下山の時にトップ・クライ

マーといわれていたリュウ・シャンが滑落し行方不明になるという事故が発生した。

2007年＝10月に4名の英米隊が北面に入つた。まず4400mにBC、4900mにABCをつくり未踏の5850mを試みたが南東の5600mの衛星峰を初登頂し引き返した。その後新ルートで北面から党結真拉5833mの第3登をする。次に遠征の主目的のヤンモーロン主峰6060mをアタックしたが成功しなかつた。5100m地点にBCを移し、北稜(頂上直下のスパート)を5400mまで登つたが、厳しい寒さと不安定な雪の状態のため断念した。隊長はデーブ・ワインージョーンズ(Dave Wynne-Jones)である。

2009年＝秋に中村の友人デレック・バッケル(Derek Buckle前アルパインクラブ副会長)ヒープの英國隊は再び北面からヤンモーロン主峰を狙うが、前述のように桑曲・桑隆西のチベット族の村人との問題が発生した。北稜に挑んだが成功しなかつた。ジョン・オットー(Jon Otto)率いる米中

(アメリカ・中国)隊は桑曲谷から追い返されて南面に入った。ヤンモーロン主峰直下の南壁に取り付いたが、不安定な下部岩壁を突破できず敗退した。ドイツ隊も南面に入つたが隊員が病氣に罹り引き返した。

2010年＝11月にジョン・オットー、ティム・ボートラー(Tim Boetlerカメラマン)と中国のクライマーが北面からヤンモーロン主峰に挑んだ。アプローチの楽な桑曲谷は入ることが禁止されているので、党巴から東の谷に入り5000mの峠を越えて北面に入った。峠からの下り急峻で数回のアップザイレンが必要だったという。苦労して北稜に挑んだが2007年の英米隊の5400mとほぼ同じ場所が最高到達点だつた。桑曲谷が閉ざされている現在、北面に入るアプローチ・ルートを見つけた意義は大きいとDave Wynne-Jonesは評価している。

かくしてヤンモーロン主峰は未だに登頂を許していない。2011年は誰がチャレンジするだろうか。

理塘高原・沙魯里山系のピーク同定を不完全ながら紹介した。この広大な山域の殆んどが未踏峰である。東チベットの念青唐古拉山東部や崗日嘎布のようなスケールの大きさ、氷河の発達、秀麗さ、峻険さはないが、四川

西部高地は外国人に開放されており登山許可取得が容易であり、アプローチも便利である。手頃な遠征の対象である。

## 日本百名山登頂報告

三井 博（昭37年卒）

日本百名山（深田百名山）は、作家の深田久弥氏が1959年に発表し、1964年に読売文学賞を受賞した著作であるが、受賞以降この百名山を目標として登山を重ねる人が多くなり、一種のブームを起こして百名山完登者が多数輩出されるようになった。針葉樹会にも何人かの達成者がおり、今さら百名山でもあるまい、という声が聞こえてきそうであるが、私も2010年10月16日に仙丈ヶ岳に登頂し、日本百名山を達成したので報告いたします。

### 一橋山岳部入部以前の山行

私が登山に目覚めたのは、高校1年の秋に単独で高水三山に登つたことによる。私の父

は山が好きだったらしく、何冊かの蔵書、紀行書、写真集などがあつて、私は受験勉強の合間にそれらを眺めて、登山に漠然とした憧れを抱いていた。高校入学後は最初水泳部に所属していたが、早い人が多くとてもかなわないでので、関心が山の方に向いていった。

さて、登山といつても、一緒に登る相手もなく装備も何もなかつたが、山渓のガイドブックを頼りに、バスケットシューズを履いて出かけた。奥多摩の軍畠から高水三山をわき目もふらずに歩き御岳駅に下りた。約5時間程度と記憶しているが、誰にも会わない静かな山であった。これに味をしめて、御岳、大岳、馬頭刈尾根、川乗山、蕎麦粒山、日原などの奥多摩登山を続けたが、友人に誘われて高校山岳部に入部した。入部直後に丹沢の水無川本流の沢登りに連れていかれた。生まれて初めて草鞋を履き、水量豊かに滔々と流れ落ちる滝に足がすくむ思いであつたが、先輩の後を追つて登ると、適度にホールド、スタンスがあつて快適に登れた。その後幾つかの滝を登り、薮を漕いで塔ノ岳に登つた。

2年になつて卒業した先輩に引率されて北アルプスを行つた。横尾にテントを張り、3日間で蝶が岳、奥穂高岳、槍ヶ岳を往復した。蝶が岳以外は長距離山行であつたが、皆若くて体力があり、誰も音を上げずに頑張つた。

3年になると受験勉強が忙しくなつたが、夏休みに山岳部の友人と二人で北アルプスの大縦走を実施した。初日は夜行列車を使って中房温泉から燕岳に登り、翌日は東鎌尾根から殺生小屋まで歩き、3日目は槍ヶ岳に登つて双六小屋まで、4日目は黒部五郎岳を越えて太郎平小屋まで、5日目は薬師岳、越中沢岳、五色ヶ原、六日目は立山一の越から室堂、弘法まで駆け下り、富山から夜行列車で帰京した。今思えばずいぶんと頑張つたと思う。その後、木曽駒ヶ岳、塩見岳、雪の雲取山等に登つた。

### 一橋山岳部時代

大学入学後はボートのクラス対抗戦に出たら自動的にボート部になつてしまい、ナックルフオーやエイトを漕いだ。しかし体力的に無理で夏を境に休部し、同クラスのいづれも故人になつた大建二郎君や朝木大統君からの誘いを受けて山岳部に入部した。

入部して最初の山行は中島寛さんと二人で行つた南アルプス三伏小屋への冬山縦走のための荷揚げであった。詳細は針葉樹会報98号（1999年4月発行）に記載したので省略するが、北岳と間ノ岳に初めて登頂した。剣岳も初登頂は積雪期で、1959年5月に中川リーダー以下6名で早月尾根経由で剣岳頂上

に幕営し、池の谷やハツ峰などのバリエーションルートを登攀した。私は中川さん、倉

知君に小窓尾根マッチ箱を往復させてもらつた。甲斐駒ヶ岳は倉知君と二人で登つたが、鋸岳経由で甲斐駒への縦走はアップザイレンも含むかなりの難路であった(針葉樹第12号参照)。鹿島槍ヶ岳や五竜岳は夏山合宿の縦走で初めて頂上を踏んだが、積雪期のバリエーションルートの登攀が思い出深い。

一橋山岳部時代はスポーツアルピニズムを旗印に先進的な活動を実践してきた積りであるが、日本百名山の登頂数は13座しか獲得で



百名山完登を果たした仙丈ヶ岳山頂で。

きなかつた。

#### 大学卒業後の登山活動

大学卒業後はご多分にもれず会社人間にな

り、山から遠ざかっていました。私が就職した会社は丸の内の不夜城と呼ばれており、まともに帰宅することはなかつた。20代後半のある日思い立つて単独で八ヶ岳に登つた。夜行列車で茅野駅に下車、バスで美濃戸口へ、そこから美濃戸、行者小屋、中岳のコルと歩いて阿弥陀岳を往復、赤岳頂上で昼食をとり、真教寺尾根を下つた。この尾根の上部は岩場であるが、下りが馬鹿長く美し森山を下つた時は既に最終バスが出た後であつた。タクシーを呼んで清里に出たが、しっかりと歩けたのでやや自信を取り戻した。しかし、その後めつたに山には行かず長い停滞期に突入した。

#### 50代以降の活動

1997年の始めの頃だつたと思うが、同期(クロ一会)で集まつた時に大建二郎君がもうそろそろ我々も山を復活しようという話になり、当時私が神戸で勤務していたので、関東と神戸の中間の山を登ろうと意見がまとまつて私が企画を任せられた。大君がどうせ登るのならば日本百名山にしようと言うので目

標を恵那山にした。大君がこのメンバーによる登山を「ぐーたら登山」と名付けようと提案があり、以降毎年夏期に出かけるようになつた。

詳細については大君が針葉樹会報第93号(2001年3月)、第97号(2002年11月)に記載しているので省略する。

2003年に大君が急逝したので、ぐーたら登山は遠藤君と二人になり、同期の友人2名を加えて、安達太良山、磐梯山、八甲田山、八幡平等に登つた。この頃から何となく日本百名山を意識するようになつたが、いかんせん登山の回数が少なく初登頂の獲得数のピッチが遅い。そこでJTBが主催していた奥白根山登山ツアーに参加したら、意外とスイスイ登れたので、以降登山ツアーに頻繁に参加するようになつた。この山行の利点は、個人では行きにくい山をバスで登山口まで楽に運んでくれて、帰りも同じバスで東京都内まで帰れることがある。これを利用すると、たとえば岩手山の夜行日帰りが可能になり、幌尻岳が2泊3日で登頂出来ることになる。非常に便利な面、余程の悪天候でない限り、催行は中止されずに一日中ずぶぬれの中を歩かされる羽目になつたこともある。ツアー会社での山行で思い出の深い山は、トムラウシ山、妙高山、火打山で高山植物が豊富にあり、ツ

アーケ内人や同行の参加者などから多くの花の名前を教えてもらつた。又、雷鳥や羚羊をまちかに眺められたこともあつた。甲武信ヶ岳の山頂から眺めた御来光も素晴らしかつた。

### 針葉樹会三月会・懇親山行など

神戸での勤務が終わり東京に戻つてくると、毎月針葉樹会の有志が集まつて、登山の計画や報告をする会があるというので、2001年の秋頃から参加させて頂いた。最初の山行は丹沢であり、中川温泉に宿泊して翌日佐羅さん、高橋さんと畦ヶ丸に登つた。この登山が縁になり、毎月三月会（当時は一木会）に出席して、針葉樹会員と山に登れるという選択肢が増えて日本百名山完登への意欲がわいてきた。私は2002年の宮ノ浦岳、2003年の平ヶ岳、白山、利尻岳、2006年の魚沼駒ヶ岳、中ノ岳を提案し、皆様と一緒に頂上にたつことができた。又、遠藤君と二人で阿寒岳、仙丈ヶ岳に登り、仙丈ヶ岳で日本百名山登頂を完成した。遠藤君が大きな用紙に、「三井兄、祝日本百名山完登、針葉樹会」と書いた用紙を仙丈ヶ岳頂上まで運んで写真を撮影してくれた。大変うれしかつた。

### 終りに

私はたまたま幸運に恵まれて日本百名山に登ることが出来ましたが、一橋山岳部時代に登山の各種の技術を教わり、重荷を背負つて縦走するなどの体力をつけて頂いたことが、百名山完登の基礎になつたと思ひます。大変有難く針葉樹会各位に感謝いたします。

今後百名山を目指す会員もいると思われますが、私の個人的な考えで注意することをあげると、次のようなことだと思います。

1. 遠隔地、交通不便な山はなるべく早期に達成すること。

宮ノ浦岳、利尻岳、幌尻岳、トムラウシ山など。

2. 技術的に難しい山も同様であるが、針葉樹会員であれば問題はないと思ひます。

剣岳など。

3. 火山活動が活発な山は入山禁止になる可能性があるので、これも早期に登ることが望ましいと思ひます。

十勝岳、岩手山、磐梯山、浅間山、阿蘇山、霧島山等。

## 平成 22 年度 針葉樹会 総会

日 時：2011年6月23日（木） 18:30～21:00  
場 所：如水会館 記念室  
参加者：出席者25名、委任状による欠席者68名。

1. 会長挨拶：竹中会長
2. 評議員会長挨拶・乾杯：石原評議員会長
3. 報告・提案の概要

### ■平成 22 年度活動報告

#### (1) 会合

①幹事会 2010年6月1日（火）

②評議員会 6月8日（火）

③総会 6月22日（火） 出席者36名

\*90周年記念事業の企画の為に、プロジェクト・グループを選任した。規約（会費）改正案が承認された。5年間の期限改正とし、出来る限り速やかに恒久案を作成し提案する。

\*白石章治会員によるスライド映写を含めた「グレートサミツツ取材余録」講演があった。

④月見の宴 11月5日（月）午後、国立部室にて  
石原、佐藤（力）、竹中、本間、前神（学生）望  
月優（部長、山友会、商3）、百瀬尊生（山友会、  
法1）、山根範子（茶道部、経2）、伊藤研祐（茶  
道部、社3）、米田卓矢（茶道部、法3）  
⑤新年会 1月27日（木） 出席者32名。  
⑥新緑の宴 4月23日（土）  
竹中、佐藤（力）、佐藤（久）、中村（雅）、西牟

田、前神（学生）、米田卓矢（茶道部、法4）、望  
月優（山友会、茶道部、商4）、山根範子（茶道  
部、経3）  
⑦三月会を毎月開催。ただし、平成23年3月度は、  
大震災の発生に鑑み、中止した。

(3) 出版物	針葉樹会報の発行
118号	2010年6月
119号	2010年10月（一橋山岳部の軌跡）
120号	2011年2月
(4) HP（ホームページ）	「活動報告書」「著作」「樹木」を新規にオーブン し、間口を広げた。

①苗場山・鳥甲山 2010年9月17日～19日

越後シリーズ第4弾は苗場山及び鳥甲山を連続して行う企画。初日は東京を朝出発して苗場山に登り、山頂小屋に宿泊、翌日秋山郷に下山し、平家の落人の里の旅館に泊り、三日目に鳥甲山をビストン往復して帰京。

②東丹沢・白山 12月12日

初冬の好天に恵まれ、「関東ぶれあいの道」を行く。白山神社からは遙か都心のビル群が見え、相模湾が広がる。昼過ぎには飯山温泉に到着、懇親会。

③倉岳山 2月11日

大雨の予報となり、中止（延期）。

④八ヶ岳スバートレイン 第1回 5月27日～  
28日

行程＝八島湿原（奥霧の小屋）物見石（蝶々  
深山）→車山乗越→白樺湖堰堤→八子ヶ峰→ア  
ダージオ。生憎の雨模様にも拘わらず、道標が完  
備していない個所を探しながら歩く楽しさが  
あった。

### ⑤図書

#### ①針葉樹文庫のメンテナンス

\*針葉樹第1号、第6号、第9号の原本が部室から消失している。復刻版についても、第7～10号、第12、13号が消失している。返却・寄贈をお願いする。

#### ②部室蔵書リストを作成した（入力完了で校正待 ち）。

### ■平成 23 年度活動計画が提案の通り承認された。

①新入会員として、吉沢 正（まさし）さん、昭和42年卒の入会が承認された。

②創部90周年事業について。  
100周年を見据えた諸活動の出発点とし、一橋大学生と関わる行事を主体とする」と。

「針葉樹」15号、記念総会は直ちに着手すること。  
予算総額は約150万円が予想されるが、会員から  
の賛助金、遭難対策基金の一部取り崩し、等で  
充当すること。（予算の承認は来年度総会にて）  
③規約改訂について。

(イ)会員構成の高齢化を見越し、会の財政の健全化を図るため、会費を次の通り改訂すること。

\*「普通会費」の他に贊助会費を設ける。

\*「普通会費」は卒業年次により金額に差を設けていたが、今後は卒業後の経過年数に拘わらず一律

5000円とする。ただし、昭和29年以前卒業の会員は従来通り免除とする。

\*「贊助会費」は1口1000円とする。全会員を対象とし、口数は任意とする。

(ロ)監事の任期を2年とする。

(ハ)評議員会の開催要件を具体的にすること。

(イ)会費支払いの猶予

会員数の減少を食い止め、長期滞納者に会費納入を促すため、今年度に限り過年度（～平成20年度）分会費支払いを猶予すること。（対象会員数25名）

1 平成23年度 役員改選

(1) 会長、副会長 爲年

会長 S 39 竹中 彰（留任）

副会長 S 37 三井 博（留任）

(2) 評議員 小林 茂雄（退任）

石原 健（留任）

議長 中村 佐薙 保（退任）

S 47 S 43 S 33 S 31 S 30 S 19

西牟田伸一（留任）

H P幹事	学生幹事	山行幹事	(3)幹事				(4)監事				
			会報幹事	会計幹事	代表幹事	総務幹事	S 38	S 40	高橋 信成（新任）	S 46	S 43
S 42 H 15 S 62 S 51 S 40 S 40 S 53 S 46 S 41 S 40 S 37 S 31 S 38 S 41 S 41 H 8 S 41 S 51	S 42 H 7 S 61 S 51 S 48	古瀬 前神 直樹（留任）	高崎 俊平（留任）	宮下 泰介（留任）	高崎 俊平（留任）	佐藤 久尚（新任）	古瀬 前神 直樹（留任）	西牟田伸一（留任）	高橋 信成（新任）	西牟田伸一（留任）	中村 雅明（留任）
岡田 山田 川名 前神 佐藤 本間 佐藤 佐藤 活朗 浩 力	岡田 山田 川名 前神 佐藤 本間 佐藤 佐藤 活朗 浩 力	倉知 敬（新任）	小島 和人（留任）	井草 長雄（留任）	川名 真理（留任）	佐薙 恭（留任）	三井 博（留任）	三井 博（留任）	高橋 信成（新任）	西牟田伸一（留任）	中村 雅明（留任）
健志 秀明 真理 直樹 力	健志 秀明 真理 直樹 力	久尚（新任）	晴彦（留任）	浩（退任）	（新任）	（新任）	（新任）	（新任）	（新任）	（新任）	（新任）
（留任）（留任）（留任）（留任）（留任）	（留任）（留任）（留任）（留任）（留任）										

3 平成23年度予算及び遭難対策基金収支見込み

（別掲）

2 平成22年度決算報告及び遭難対策基金収支報告

（別掲）

\*提案通り承認されたが、収支が均衡するような対策（会費の増額、もしくは会報発行頻度の見直し等による経費の節減）が中期的には必要になる。

4 懇親山行

①夏の山行 9月 巻機山、（金城山）

②秋の山行 10～11月 倉岳山（昨年中止になつた）

③冬の山行 2月 未定（富士山のきれいに見える

山へ）

④春の山行 5月 八ヶ岳スープートレイル第2回

5会合

①月見の宴 11月

②花見の宴 4月

③三月会（毎月第3月曜）

#### 6 出版物

##### 針葉樹会報の発行

121号

2011年6月 発行

122号

2011年10月 発行予定

123号

2012年2月 発行予定

##### 7 会員の異動

▽新規入会 吉沢 正 昭和42年卒

▽会員のご逝去

齋藤 三郎 平成22年5月

山本 尚穎 平成23年2月25日

中川 滋夫 平成23年3月24日

#### 8 学生の活動状況

##### 部の組織体制（登録メンバー）

（リーダー）望月 優 商学部4年（山友会）

山根 範子 経済学部3年（茶道部）

伊藤 研祐 社会学部4年（茶道部）

米田 卓矢 法学部4年（茶道部）

8月19～21日に徳澤園にテント泊でOBと

蝶ヶ岳合同山行。

議事終了後、中村保会員による講演「アンデス遠征50周年に寄せて」がおこなわれ、最後に全員で山讃賦を歌つて散会した。

### 針葉樹会総会資料 一橋山岳会90周年事業（案）

平成23年6月23日

2012年の一橋山岳部創設90周年につき、竹中会長の下、以下の検討チームで議論し、全会員へのアンケートを実施し、適宜、石原、佐藤、中村（保）、上原、大橋（喜）、石、倉知会員から御意見を頂いてきました。その成果を今回幹事会・評議委員会にて御審議いただきました。幹事会・評議委員会で承認いただきました以下の90周年事業案実施を針葉樹会総会に諮りました。

検討チーム＝竹中、三井、高橋、本間、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、金子、西牟田、井草、〔幹事〕小島、高崎（俊）

#### 1. 基本方針

特別な活動は不要との意見もありましたが、一橋山岳会員諸先輩の活躍、日本登山史に残された足跡と90年の歴史を経て尚会員相互の親睦と共同登山など活動を続ける針葉樹会の現状を祝い、過去の歴史の整理を実施し、会員と将来の会員の可能性を期待して90周年事業・行事を実施致したい。現役学生の実質不在及び針葉樹会員の高齢化・少數化との現状を踏まえ、身の丈相応の一橋山岳会と会員の為の、そして基礎となる一橋大学生と関わる行事を限られた予算の中で実施する事とした。昨今、登山の意味合いは大きく変化しているが、山が好きで山

に登る、登りたい若者はおり、新たな学生山岳会の再生を願つて100周年を見据えた今後10年間の諸活動の出発点とする事業・行事とする。

#### 2. 一橋大学との協調関係

一橋大学の基礎は大学学生です。他大学でも先輩が現役学生開拓に大きな努力をしている例が見られます。我々も90周年の機会に、大学現役への働きかけ強化、そして山に興味を持つ若者の掘り起しを願つて、大学の協力も得ながら学生との接触強化を進める事に致したいと考えるもので。何年か続ける事が大事であり、取敢えず以下の活動を90周年に始める為に新年度に準備に入ること下さい。

①来年度総会、記念講演、身内と学生有志のパーティーを大学構内で企画

②一般学生対象に毎年、清掃を兼ねた富士登山企画

③一般学生対象に芦安村での登山教室、夜叉神ハイキングへの勧誘

今後上原さん石さんらの協力を得て大学院の阿部教授や経済学研究科教授の水岡不二雄さんともコラボしてみる。

#### 3. 実施プロジェクト

3-1 針葉樹15号——推進担当：岡田さん、中村（雅）さん

1985年度から2010年を対象とする針葉樹15号を来年6月に発行する。本来登山を実施した会員が努力すべきであるが、実情は無理があ

針葉樹会平成22年度 一般会計決算  
(平成22年6月4日—23年5月31日)

(単位 円)

支出		収入			
項目	実績	予算	項目		
<b>A) Cash Base</b>					
会報発行費	515,677	560,000	前年度繰越 納入会費	731,137	731,137
山岳部補助	0	30,000	会合余剰金	631,000	440,000
通信連絡費	60,153	50,000	預金利子・利息	104,254	10,000
慶弔費	35,286	30,000	寄付	213	1,000
学生保険補助	0	20,000	会報販売代金	10,000	
日本山岳会会費(注)	12,000	12,000		5,000	
Home Page年間維持経費	50,420	50,000			
図書関係費用	0	20,000			
(支出小計)	673,536	772,000			
次年度への繰越	808,068	410,137			
(期末通帳残高)	808,068				
<b>合計</b>	<b>1,481,604</b>	<b>1,182,137</b>	<b>合計</b>	<b>1,481,604</b>	<b>1,182,137</b>

(注)前年度前払い分を計上

針葉樹会平成22年度遭難対策基金決算  
(平成22年6月4日—23年5月31日)

支出		収入			
項目	実績	項目	実績		
支出	0	前年度繰越	3,236,650		
		うち遭難対策基金	2,336,650		
		うち遠征基金	900,000		
		利息他	3,873		
(年度内実支出 小計)	0	(年度内実収入 小計)	3,240,523		
次年度繰越	3,240,523	3,237,650			
うち遭難対策基金	2,340,523	2,337,650			
うち遠征基金	900,000	900,000			
<b>合計</b>	<b>3,240,523</b>	<b>3,237,650</b>	<b>合計</b>	<b>3,240,523</b>	<b>3,237,650</b>

針葉樹会平成23年度 一般会計予算  
(平成23年6月1日～平成24年5月31日)

支出		収入			
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
会報発行費	420,000	515,677	前年度繰越	808,068	731,137
山岳部補助	30,000	0	納入会費	400,000	631,000
通信連絡費	80,000	60,153	会合余剰金	50,000	104,254
慶弔費	30,000	35,286	利息利子	1,000	213
学生保険補助	20,000	0	会報販売代金	5,000	5,000
日本山岳会会費	12,000	12,000	寄付	0	10,000
Home Page年間維持経費	53,000	50,420			
図書関係費用	20,000	0			
(年度内支出 小計)	665,000	673,536	(年度内収入 小計)	456,000	750,467
次年度への繰越	599,068	808,068			
<b>合計</b>	<b>1,264,068</b>	<b>1,481,604</b>	<b>合計</b>	<b>1,264,068</b>	<b>1,481,604</b>

針葉樹会平成23年度 遭難対策基金予算  
(平成23年6月1日～平成24年5月31日)

支出		収入			
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
支出	0	0	前年度繰越	3,240,523	3,236,650
			うち遭難対策基金	2,340,523	2,336,650
			うち遠征基金	900,000	900,000
			会員よりの寄付	0	
(年度内支出 小計)	0	0	(年度内収入 小計)	3,242,323	3,240,523
次年度繰越	3,242,323	3,240,523			
うち遭難対策基金	2,342,323	2,340,523			
うち遠征基金	900,000	900,000			
<b>合計</b>	<b>3,242,323</b>	<b>3,240,523</b>	<b>合計</b>	<b>3,242,323</b>	<b>3,240,523</b>

るので貢献可能な針葉樹会員が努力して纏め上げる。

該当する年代の針葉樹会員の海外での記録、小谷部さんの山日記など学生の山行記録以外

の追加など編集方針につき会員有志の御意見を頂きながら進める。予算：約80万円

3-2 記念総会——推進担当：高崎さん  
身内の行事とする（外部団体への参加要請はしない）。総会、講演会、立食パーティー程度を国立の大学構内で実施。予算：10万十参加費

3-3 富士（清掃）登山——推進担当：佐難さん、三井さん、前神さん、井草さん

来年夏を第一回として今後十年、毎年夏に富士登山に学生を案内。予算：年20万円。今後清掃活動については以下の機関と連携をとつて富士登

山の一環として可能な範囲で実施。  
富士山を綺麗にする会、富士山ネットワーク

3-4 芦安村活性化事業——推進担当：上原さん、本間さん、高橋さん、中村（雅）さん  
針葉樹文庫を設けた芦安村との絆を強くし、山岳館を中心に芦安村活性化を進める芦安ファンクラブに協力する。一橋大学及び学生が芦安村を利用する企画の先導役になる。取敢えず今後10年の息の長い関係作りの一歩を芦安ファンクラブの以下の活動に参加する事から始める。予算年20万。

▽中池からのハイキング道、あるいは峠西口の道の整備に協力し、道標のみでなくハイキング道の一部に一橋の名前が残るような事を企画。年数回会

員が作業に参加。道標の提供。

▽登山学校などの企画に会員が参加し、また、一橋の学生が参加する機会を作る。

#### 4. 予算の考え方

上記の事業を進めるには針葉樹発行での概算80万円を中心に約130～150万が必要になると考えられます。予算の御承認は来年度の総会ですが、針葉樹発行は直ちに作業開始となります。会財務の現状は年会費収入が約46万円で逼迫している。従い遭難対策基金の一部活用、あるいは、今般新設が提案されている賛助金とか針葉樹配布賛助金などが必要になりますので御理解頂きたく存じます。

#### 5. その他

検討会チームでは会員からの提案により以下のような案件も検討いたしましたが、実現性困難等の理由により90周年事業のなかでの検討からは外されました。

##### ①海外登山

②ホワイトセール遭難の遺体搜索  
③大学への寄付

鈴木羊三／特別会員 相変わらず、しがない目医者をやつております。  
山崎孝寿／特別会員 申し訳ございません。やはり日程の調整がつきそうになく欠席とさせて下さい。  
深谷光茂／昭和16 元気に過ごしております。ご盛会をお祈りします。  
佐藤政雄／昭和17 腰痛にて病床中です。お手数有難うございます。

林 正敏／昭和17 嘔下力低下に因り、昨年來誤嚥肺炎頻発、胃に「胃ろう」を設けて栄養はこれにより、飲み食いはできぬ毎日で体力回復に努めおります。ご盛会を祈りおります。

真木淳一郎／昭和22年 特に異常はないが、総会に出席する健康の自信なく、欠席通知で失礼します。老人専用の引退者用ホームで日々の生活をこなしてはいるが、総会には欠席する、できる自由をお許し願いたく。

大島理則／昭和23 地域活動を中心に日々を過ごしており、年齢問題もあり殆ど山歩きはしております。總会の盛会を期待し念じております。  
中村正司／昭和28 お陰様で元気にやつてます。  
6月初旬の油画家展が終わると都展など関係す

## 2011年 針葉樹会 総会 会員の近況

### 近況報告

る団体の監査など、道楽とは云え重なり、当日も重なり、失礼します。同期も今や2~3人だけが会合を持つ始末です。

海老澤 齊／昭和 28 まあまあ元気にしておりますが、仲間も少なくなり山行きは計画がありません。

西村 勝／昭和 28 ご案内ありがとうございます。

佐羅 恭／昭和 31 6/13の評議員会、先約ありと難聴が進み、外出を控えておりますので悪しからず。ご盛会と皆さまのご健勝を祈りあげます。

白川隆夫／昭和 30 吾家からスカイツリーと武甲山が見られます。

鈴木克夫／昭和 31 先の約束があり、残念ながら欠席します。6/23は目の手術の予定日のため、欠席（の予定）です。

岡 慎郎／昭和 32 会費納入ご迷惑おかけしています。ご指示通りに5/9振込致しましたのでご容赦下さい。小生、関先生と同じ肺気腫の持病があり、かなり進行し、重度で不本意な日々を過しています。僅かな楽しみは下手な俳句を同期有志と捻っている程度です。皆様のご健勝とご盛会をお祈り申し上げます。（拙作）老いたれど妻のちぶさは桜草 朝日新聞俳壇金子兜太撰（旧作です）

上原利夫／昭和 33 5/29（日）芦安へ。山岳館で芦安ファンクラブの清水事務局長らと面談し、

当部創立 90周年記念事業の骨格を打ち合わせました。75年前の一橋山岳部の記録を芦安にのこす意義はあります。芦安山岳館と芦安ファンクラブの協力があつてこそ実現できるもので、小谷部さんの著名度にあやかれるのは幸せです。

西海隼雄／昭和 33 特記事項なし。出状し忘れ申し訳ありません。

宮川守久／昭和 33 佐羅先輩、富士山検定1級最高点にて合格おめでとうございます。我々後期高齢者族にとり、気力・知力・体力の三拍子揃われた富士の高嶺を仰ぎ見るような存在です。

新井慶司／昭和 33 今年 12月、78才になります。

10 日に1回位、ゴルフなどして、どうにか元気に過ごしております。昨年7月には、夫婦で、スイスのみ、10日間の旅をして来ました。皆様に宜しく。

沢木一夫／昭和 34 每日10,000歩を目途に家の回りを歩いています。いつの日かまた剣岳の頂上に立ちたいと思いつつ…（そんなことは無理か）皆様のご健勝を祈ります。

小峰 隆／昭和 35 元気にしてます。

丸子博之／昭和 35 ボート、ボートの日々です。

4月24日開催「東商戦」（日本最古のレガッタ）エイト三連覇、9種目全勝、史上稀な快挙達成。8月のインカレ（全日本大学選手権）ではエイト三年連続決勝進出！国立大として稀有なメダルに挑戦します。今年は新入生39名入部、大いに志気が上がっています。

石 弘光／昭和 36 放送大学を4月一杯で退任、これから時間がとれるので、針葉樹会の活動に参加しようと考えておりました。折悪しく、6/23は出張中と重なりました。

永井新也／昭和 36 ヤロー会の会員である故山本尚穂、故中川滋夫の葬儀に際しましては、針葉樹会員の多数が参列下さり、厚く御礼申し上げます。

三股 宏／昭和 36 山に登ることはできません

が、元気にしています。山岳部の関係では、35年の中西、小峰先輩とゴルフを年3回やっています。团碁は60才より始めましたが、関西棋院の土曜会（プロの指導者）に入り、今年4月に5連勝して、5段の免状（無償）をもらいました。

高橋信成／昭和 38 当日、ボランティア活動がありますので、失礼します。

蛭川隆夫／昭和 39 雪国で閉じこもりになつてはいけないと想い、1月からクロカン（歩くスキ）に挑戦。公園のコースをいくつか歩き回り、大会にも出場（と言つても3kmの初心者コース）。2月末の小野プロジェクト（ニセコ方面）ではゲレンデ・スキーの個人レッスンでお茶を濁しましたが（用具もレンタル）、3月になつて急にスキー志向が高まりゲレンデ／山の兼用セットを揃えました。4月から5月中旬まで、小野さんなどの指導を受けながら、ゲレンデ2回、山スキー4回と70歳で始めた（とても再開とは言えない）のでスキにはまりました。来シーズンの到来が待ち

遠いこの頃です。

竹中 彰／昭和 39 J A C 東京多摩支部の活動も徐々に軌道に乗りつつあります。設立時の目玉プロジェクト（都県境）分境嶺踏査も第6回を数えて、常に会員外の一般参加者も20人前後集まります。第1回から連続参加する方も5人位（最高齢は80才）います。

村上泰介／昭和 39 4月より広島大／院博に入院、暇つぶしとボケ防止に努めています。6月初旬に室内と英國旅行に行く予定です。レンタカーでの（年令上限になったので）旅はこれが最後かも。御盛会と皆様のご健登を。

中橋寿雄／昭和 39 足腰は不調ですが、それなりに自適しています。盛会を祈ります。

三森茂充／昭和 40 足萎えと腰痛で座つてできる人造湖、ボートのつりを指向しています。

坂井溢弘／昭和 41 馬齢は「古稀」に達しましたが、まだまだこれからが本来の人生と考え『古稀なんぞどこ吹く風と梅の花』とうそぶいています。ご盛会を祈ります。

齋藤 正／昭和 42 親類4軒が被災。今暫く自重の気分。

吉沢 正／昭和 42 初参加です。宜しくお願ひいたします。

藤原朋信／昭和 44 東日本大震災後、活動を抑えていましたが、今はアウトドア生活を再開しています。

宮武幸久／昭和 45 久し振りに出席させて頂きま

す。

西牟田伸一／昭和 47 昨春の懇親山行以来足が痛くて困っています。

井草長雄／昭和 48 5月、6月はわさび田作業が最も忙しい時期で、毎週のように奥多摩へ通つています。今シーズンは2000本の苗を植える予定です。

西田研志／昭和 49 次回からはご案内等は結構ですでの、ご連絡まで。

加藤博行／昭和 51 5月連休初めに倉知さん、前神さん、柿原（和）さんと三条地元の栗ヶ岳（1293m）に登りました。残雪期に適した山で天候は今ひとつでしたが、楽しく登れました。総会は平日ゆえ参加できませんが、盛会をお祈りします。

兵藤元史／昭和 52 インドネシア、ジャカルタに駐在しております。

佐藤浩朗／昭和 53 仕事の会合と重なるため、欠席致します。昨年転職して以来多忙で山から遠ざかっていますが、今年は復帰していきたいと思っています。

米田篤裕／昭和 55 先約があり、残念ながら出席できません。盛会を祈念しております。

安島孝知／昭和 59 いつも幹事等ご苦労様です。

川名真理／昭和 62 冬はゲレンデスキーニ通い、5月は八甲田山スキーを楽しみました。震災ボランティアへの参加を検討していた矢先、5月に父が亡くなり、しばらく千葉の実家に頻繁に帰るこ

## 新入部員歓迎山行（蝶ヶ岳）

竹 中 彰

となりました。本日は仕事の関係で失礼します。

井上裕之／平成 2 針葉樹 15号、原稿執筆のため1989年度の活動報告書を探しています。どなたかお持ちでしたらご連絡頂けませんでしょうか。宜しくお願ひ致します。

田形祐樹／平成 6 伊勢に遊びに来て下さい。

12:30 過ぎに上高地バスターミナルに到着し、帰りのバス整理券を確保して、2階の食堂で昼食を取り、アイバーで学生を引率して来る筈の前神グループを探すが、見当たらないのでスタートする。ビジターセンターに少し立ち寄つて明神には13:38に着き、休憩していると思わぬ人に声を掛けられる。見ると日本山岳会東京多摩支部のメンバーで、小川幹事長、坂本幹事、宮崎前山岳会副会長、今田常任評議員などで、何事かと聞くと、神崎日本山岳協会会長が主宰する軽登山靴俱乐部総勢20名（？）の山行サポートで、横尾→穗高山荘→奥穂→前穂→岳沢のコースを辿る計画とのこと。その後はこのグループと前後しながら、晴れ間の広がる中、残念ながら明神の峰々はガスに隠れていたが、足下のハクサンシヤジン、キンコウカ、カラマツソウなどに慰められながら15:10に目的地の徳沢園のキャンプ場に着く。

暫らく休んでいると、少し離れた所のテントから前神が現われる。聞くと我々よりも20分位前に到着したこと。早速徳沢園前の水場近くのテープルに全員集結して乾杯、メンバーの自己紹介を行う。旧人は茶道部からの助つ人（米田・4年生、日立造船に内定、紅一点山根・3年生で就活中）及び新人2名の計4名。

新人は何れも2年生で、小宮山は千葉出身で前年

はボクシング部に在籍したが、過酷な減量に方向転換を決意したこと。町田は小学生時代からのサッカー少年で、前年はサッカー部に在籍したが、練習漬けで時間的余裕が無いので方向転換したこと。両君とも山登りに掛けて見たいとの意欲を感じられた。4時頃から前神シェフが用意した鶏ツクネ入りのトリ鍋の準備にかかり、登山の基礎知識、準備すべき装備など各種のツマミと焼酎で歓談する。幸い天気も安定していて屋外で快適に宴会が進む。新人も含めて流石に若手は身軽でバランスも良い、高い段差も難なく乗り越えて進む。50歳の年令差のある当方がドッコイショとバランス悪く付いて行く。樹林帯の中の急登を傘を差して進む。途中、地図上で展望が良いと言う蝶ヶ岳などもあるが、ガスの中で全く視界は利かない。4ピッチ目に漸く長屏山の三角点に着く。その後若干登り下りを経て傾斜も緩やかになり池塘の横を過ぎ樹林帯を抜けて地図上の妖精ノ池辺では綺麗な花に迎えられる。ハクサンコザクラ、コバイケイソウなどである。植生もハイマツに変わり高度的にはかなり来た、そろそろ一本立てるかと思う頃、相変わらずガスが往来する中で突然、真新しい標柱が現われ、蝶ヶ岳山頂と鮮やかに記されていた。頂上までは未だ半ピッチ位は要するに心積りしていたので、些か拍子抜けする登頂であった（11:10）。流石に稜線は風も出て雨具などを着込んで対処し、各自昼食を取り。

5:30 に起床して準備を整え、6:30頃に昨日の炊事場に向う。木々から滴が落ちていたが、雨は上がりつおり、前神と計画について打ち合わせるが、先ずは朝食とのことで、昨夜のトリ鍋のスープにレトルト米飯3パックを入れて雑炊を作る。その内部員も集まってきて、昨夜の雨は相当酷かったとのこと。フライシートで覆つてるので漏水はなかった様だが、シュラフカバーのみの前神と部員は寒さが堪えたとのこと。部室の器具庫で先輩のお下がりのザック、シュラフ等を参加者に配分したが、全員分は揃わなかつた様で、シュラフカバーで我慢した部員もいた。

稍々少なめの朝食であつたが取り敢えず腹に納め、天気も小康を保つている間に行ける所までといふことで蝶ヶ岳に向けて7:00に徳沢を出発する。

徳沢園の裏から急登が始まる。略40分ピッチで進む。新人も含めて流石に若手は身軽でバランスも良い、高い段差も難なく乗り越えて進む。

途中、地図上で展望が良いと言う蝶ヶ岳などもあるが、ガスの中で全く視界は利かない。4ピッチ目に漸く長屏山の三角点に着く。その後若干登り下りを経て傾斜も緩やかになり池塘の横を過ぎ樹林帯を抜けて地図上の妖精ノ池辺では綺麗な花に迎えられる。ハクサンコザクラ、コバイケイソウなどである。植生もハイマツに変わり高度的にはかなり来た、そろそろ一本立てるかと思う頃、相変わらずガスが往来する中で突然、真新しい標柱が現われ、蝶ヶ岳山頂と鮮やかに記されていた。頂上までは未だ半ピッチ位は要するに心積りしていたので、些か拍子抜けする登頂であった（11:10）。流石に稜線は風も出て雨具などを着込んで対処し、各自昼食を取り。

昼食中に他の団体も到着し、俄かに頂上が混みあつて来る。30分ほどの休憩で我々も腰を上げて蝶ヶ岳ヒュッテ経由で山頂展望指示盤横を通り、横尾への下山路に向う。ガスと風の中を15分位進むが見通しが悪く、標識も見当たらず一時待機する。

先行して偵察していた前神が前方から来た登山者に確認し、間違いないとのことで少し進むと、左への矢印で横尾下山路の標識があつた。少し下ると樹林帯に入り風は遮られるのでホツとする。相変わらず雨は降り止まず、傘を差しながら急下降を続ける。降り止まぬ雨、木の根や岩混じりの歩き難い下山道をひたすら進み、3ピッチで槍見台を経て全員無事に横尾山荘前に到着する。

ガスに巻かれて屏風岩は下部が見えるのみ。少憩後、キャンプサイトの徳沢に向けて梓川左岸を辿る。徳沢に着いた。到着した。相変わらず雨が止まず、夕方の宴会場所に前神が心配している。我々2名が素泊りしている徳沢ロッジにチエックインする際に自炊場所を確認した所、特別の計らいでロッジ内の談話室のペチカの土台部分でガスストーブで炊事することを許可してくれた。早速全員で談話室に上がりこみ、ソファに座つてビールで無事の蝶ヶ岳登頂を祝す。快適な環境の下で、この日はキムチ風鍋で宴会準備に入る。現役部員は何れも雨への対策が不十分で多くは靴の中が水浸しになり不快だった様だが、今後の勉強材料と言えよう。

### 第三日 8／21（日） 雨のち晴れ

予定通り7時前に前神たちは談話室に陣取つて朝食は昨夜の鍋のスープを利用してラーメン（乾麺の冷し中華）を鍋で煮込む。人数にしては少なめの朝食ではあつたが、冷し中華スープの酢が利

いたユニークな味付けのラーメンであつた。既にテント組は撤収して来ていたので、立つ鳥跡を濁さずで場所の掃除を終了後8：35にロッジを出発した。

今回の山行は8月にしては天気には恵まれなかつたが、目的の蝶ヶ岳に全員登り、歓迎の食事会では懇親の実も挙げられ（山岳部合宿では山中アルコールは厳禁と繰り返し伝えたが）、参加した一行からはもっと山に行きたくなつたとの感想も洩らされたので、企画実施責任者の前神さんの狙いは報われたと思う。ご苦労様でした。

我々OBの今後の課題は、前向きになつている新人を今後如何に適切に指導しながら成長を図つて行くかである。指導体制、カリキュラムと財政的な支援策をキチンと確立する必要がある。

帰り道学生とも話したが、悪天候だつたけれど、だからこそもう一度来たら良い景色を見れるかもしれない、また来ますよ、と。結構彼らにとつて驚きだつたのは（私にとつても）上高地に野生のサルがどんどん出でてくること。そういう自然にこれまで接したことない彼らには新鮮だつたようです。

まだテントを張ることも、野外で食事を作ることも、殆ど経験していない学生にどうやつて山の生活・活動ノウハウを教えるかですが10年ほど前もそうであつたように、文部省の学生に対する山岳実地研修への参加とか、日本山岳会・学生部との交流がおそらく最も有効かとおもいます。OBからの伝授は、やはり社会生活という足かせの中にいるOBにそろそろ多くのことを期待できず、また最新の技術や道具の使用を教えるのであれば言わば公的な組織を使うのが最も有効な手段なのでしょう。学生もそらつて、学生に一気に山のファンになつてもらおうとしたものだつたが、山は甘くはなかつた。

上高地に入った初日に僅か明神の岩峰が見えた

のを最後に後は雲と雨ばかりで、とても山を楽しむというものではなかつた。学生にとつては最初になるとテント泊も二夜とも雨音がうるさくて、もしかするとテントに浸水があるのかと思わせるような強さではあつたが、やはり学生は若い。余り気にすることもなくよく寝ていた。これから先ももっと酷い天候に遭遇することもあるだろうし、最初にこのよう悪天候に遭つておけば、山はこんなものとたかを括らなくて良いかもしね。

### 今後に向けて

#### 前 神 直 樹

今回の山行は蝶ヶ岳山頂からの、穂高連峰・槍ヶ岳へと続く北アルプスの雄大な眺望を堪能してもらつて、学生に一気に山のファンになつてもらおうとしたものだつたが、山は甘くはなかつた。

上高地に入った初日に僅か明神の岩峰が見えた

# 三月会通信

■平成23年6月23日■

【出席者】 高橋、竹中、高崎（俊、記録）

▽針葉樹会の総会を3日後に控えてか、参加者3名の寂しい「三月会」になりました。去年はこれ程の事態にはなりませんでしたので、寂しい限りでした。来年は総会との日程調整が必要になります。

▽「富士山検定」の初級・上級の試験問題を印刷して持参しました。富士山学博士からの解説を期待していたのですが、適いませんでした。

▽高橋さんは5月30日に、下見を兼ねて「芦安ファンクラブ」を訪ねられました。上原さん、小島さん、本間さん、中村（雅）さんも一緒にいました。残念ながら雨のため、実地調査は出来ず、打ち合わせだけで終わってしまったそうです。今年は高谷山の南側にある「カンバ平」から桃の木鉢泉に降りる登山道、来年は夜叉神峠から広河原側の観音寺トンネルに降りる登山道が補修の対象になります。西山温泉、奈良田温泉、鳳凰山、御座石鉱泉、ドノコヤ沢等は大昔の孝謙天皇の時代に遡る歴史的な名前だそうです。

北岳バットレスの崩壊はマッチ箱付近だけに留まらず、かなり規模の大きいものだったようで、

バットレス全体が入山禁止だそうです。

▽また、高橋さんからは、世田谷区成城にある「新明の森みつ池特別保護区」におけるボランティア活動の話がありました。武藏村山市緑ヶ丘付近に発し、大田区嶺町付近に至る「国分寺崖線」の一部で、東京都には他に明治神宮、和田堀公園などがあるようです。敷地面積は約7,000坪、「育てる会」が主体となって維持管理し、世田谷区が支援しています。電動の機器は使用が禁止されていて、すべてが手作業のため人手が欲しい、という話です。

▽NHKの白石さん（昭和61年）が制作統括をされているBSの番組「グレートサミツツ」で計画されていたエベレストにハイビジョン・カメラを持ち上げて、頂上からの景観を放送する作戦は成功裏に終了したようです。8月13日に再放送があるようです。

6／4 凤来寺山(三四郎会集会には蛭川、本間、小島他多数)。三四郎会では半場さんが大活躍。  
6／19 三頭山（深山橋～丸山尾根～スカサス山～三頭山～都民の森）。東京多摩支部第7回分境嶺踏査山行、会員・一般計38人参加。梅雨の晴れ間。

中村（雅） 6／2～6／3 木曾駒・宝剣岳

6／2 千畳敷から宝剣山（山荘泊）

6／3 木曾駒・宝剣岳往復。岡田さん、斎藤さん、吉沢さんと4人。下山後に三四郎会に合流。

6／4 凤来寺山。三四郎会山行

▽村上さん、英國ドライブ旅行は如何でしたか？

■平成23年7月19日■

【出席者】 三井、小島、佐藤（久）、中村（雅）、宮武、井草、川名、高崎（俊、記録）

▽大型台風（6号）の接近に伴って、関東地方にも大雨・強風の予報があつて、参加者8名のやや寂しい「三月会」になりましたが、宮武さん（昭和45年卒）の初参加、川名さんの久々の登場がありました。先月と同様に、「富士山検定」の初級・上級の試験問題を印刷して持参し、富士山博士からの解説を期待していたのですが、またも適いませんでした。

●山行記録  
三井 5／17 懇親山行下見  
5／18 守屋山（林立峠～守屋山東峰～守屋山往復）。遠藤晶士さんと。  
5／28 懇親山行、八ヶ岳スープトレール第1回。  
高橋 5／27 チクマ山・奥多摩 白丸駅～チクマ山～鳩ノ巣駅。クラスメート4人と、下山後河辺温泉「梅の湯」に入る。

竹中 6／3 乳岩

▽宮武さんは、1967年のヒンズークシユ遠征に

最年少（20才）学生隊員として参加されました。

最近定年退職され、これからは積極的に針葉樹会

活動に貢献して頂けそうです。還暦を記念して富

士山に登ったので、65才の時には、富士山より

標高の高い山、例えばキナバル、玉山、韓国第2

の高峰、等を狙っているそうです。

▽参加メンバーからは「キリマンジャロ」、「カラバ

タール」はどうだ？と話が出ました。技術的には

両方とも難しくなく、ハイキング程度だけれど、高度順化を上手くやることがカギになる、との助

言もありました。

▽90周年記念行事で富士山清掃登山を計画するな

ら、如水会の山梨支部にも協力を依頼するべきで

はないか。故丸茂先輩は甲府の商工会議所、ロー

タリークラブなどで活躍された有力者だったの

で、この縁故も使わせて頂こう、と言う皮算用に

なりました。

▽現役学生のリクルートをするには、「部室」と言

う財産を活用するべき。そのためには、「山ガ

ル」等が訪ねて来ても嫌われないように、部室の整理・整頓・清掃をして少しは綺麗にしよう、と言った事になりました。7月23日（土）に第1回目の清掃活動を行いました。

▽最近、木曾駒・宝剣に登られた小島さんから、「登るなら日曜日がいいぞ。若くて綺麗な山ガールが一杯登っているぞ！ケーブルの駅から1時間も歩けば頂上だし」との報告がありました。ただし、

「宝剣頂上の岩登りはチョット怖いかな？」だそうです。

### ●山行記録

小島 7/9 車山

7/10 木曽駒ヶ岳、宝剣岳。天気良く、気分良し。

佐藤（久）なし

高崎 7/16 八ヶ岳・天狗岳。唐沢鉱泉に車を

停め、西尾根から西天狗・東天狗・中山峠・黒百

合平経由で唐沢鉱泉へ降りる。大勢のアブに攻められた。

中村（雅） 7/6～7/10 表大雪・花の山旅  
家内・長男・家内妹と4人。

7/6 羽田～旭岳温泉

7/7 旭岳温泉～旭岳～間宮岳～白雲避難小屋

7/8 高根ヶ原往復

7/9 白雲避難小屋～黒岳石室

7/10 石室～層雲峠温泉。旭岳へ登った日は快晴、その日以外は強風雨。定山渓に下る予定であつたが、強風雨の為途中で引き返し、層雲峠へ下る。雪融けが遅く、高山植物はイマイチ。

宮武 なし  
井草 土・日 奥多摩・鳩ノ巣でワサビ田作業、農

■平成23年8月15日■

【出席者】 上原、三井、竹中、本間、小島、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、高崎（俊、記録）

▽猛暑日が続いて、ワザワザ都心に出て来るのは大変かも知れません。今回も参加者は9名と低调な感じが否めません。

▽8月6日（土）に「富士山をきれいにする会」の50周年記念式典が開催され、三井さん、小島さん、宮武さんが参加されました。環境大臣、知事、関係市町村長も参加した一大イベントであったようです。翌日の山梨日日新聞には、この3名の方々が写真入りで大々的に報道されました（この記事は一橋山岳会のホームページでご覧になります）。

▽一橋山岳会は1964年から他大学山岳部・WV部をリードする形でこの活動に参加しました。当時は、登山道の周囲はゴミだらけで、南京袋に詰め込んで担ぎ下ろしたゴミの量も大変なものでした。最近では、特に5合目以上は見違えるように綺麗になつたようです。この活動は「富士山をきれいにする会」から高く評価されています。小島さん以下、90周年事業の一環として来年以降、現役学生を巻き込んでの活動に発展させたい、と意気込んでいます。

▽意欲的な登山活動を続けていた前期高齢者2名と若手OBの3名のパーティが今夏も黒部源

流を目指しました。薬師沢から赤木沢を遡行して主稜線に出、鳥帽子岳まで縦走する計画でした。10日の夜行バスで出発、15日（三月会の当日）に下山と言う計画で、三月会は欠席される予定でした。ところが、三月会には前期高齢者のお二人が参加されました。以下、他山の石として下さい。

▽ 10日の夜行バスで有峰に行き予定通り 11日快調に薬師沢小屋に入りました。12日の天候は快晴との事で張り切つて沢登りの準備をし、ビールで明日の健闘を誓いました。夕食時にメンバーの一人が眩暈がして倒れ頭を打つてしましました。本人は「大丈夫」との事で直後から話もまともに出来、傷はほんのカスリ傷程度でしたが、優しい、美人の看護師が登山者の中にいて、「一瞬とはいえ意識を失つたのだし頭を打つているので6～7時間は絶対安静、場合によつてはヘリで直ぐ病院に行くべし。」とのアドバイスで、大事を取りアドバイスの基本を受け入れました。看護師さんのボーキフレンドと思しき元レスキュー隊員も加わり、「暫く絶対目を離すな」とのことと一時はどうしようかと迷いも出ました。しかし本人が元気なので直ちにへりは頼まず、必要が出れば、翌早朝依頼出来る手はにして、安静にして6時間、頭を冷やして監視を続けましたが、本人は元気で様態に変化はありませんでしたので、午前1時ごろに休みました。

▽ 12日の午前5時頃から起きだして、体調をチェックしましたが大丈夫そうなので、看護師さ

んとも相談の上、下山することにしました。とにかく何かあつたら医者のところに行けるようにして置くべしとの判断です。恐る恐る出発しましたが本人は普段と変わらず、自分の荷物は自分で担ぎ元気に折立に下山バスと電車で富山に出て帰京しました。

▽ 以下、ご本人による反省。

(1) 看護師さんから入山した11日の行動中に摂取

した水分が不足(2リットルくらい飲むべきところ、0・5リットリ)していた所にお酒を飲んだため悪酔いした、と指摘されました。この日は小雨がぱらつき、時折薄日が差す天気だったこと、自分としては普段より水を飲んだと思うので、行動中の水分が少なかつたとは思いません。ただ、夜行バスで行き、トイレ休憩の都度、小便をしたのでいつもより体内の水分が少なかつたことは確かです。夜行バスで行く時は、いつも以上に水分を取るべきでした。

(2) 転倒した直接の原因は、ビールの酔いが残つていたところに薄い水割りウイスキーを1口飲んだことです。実は、過去に何度もビールを飲んだことがあります。実は、過去に何度もビールを飲んだことです。後にワイン・エ・ウイスキーを飲んだほんの小量でも、時に、急に気分が悪くなり、場合によっては一時的に意識がなくなつたことがありました。

この危険は自覚して気を付けていたのですが、あの日は翌日には好天が見込まれ、念願の赤木沢を

通行できると気持ちが高ぶり、油断してしまいました。この危険を抱えている訳ですから、本来、山中では酒気厳禁でした。今後、山中では禁酒します。

(3) 山岳保険（レスキュー費用保険）には入つていましたが、保険の名前さえ思い出さないお粗末さでした。保険証券のコピーを持参すべきでした。

(4) 登山計画書を2部持参しながら、折立登山口、太郎平小屋のどちらかで提出できたのにしました。今後、提出励行します。

(5) 救急薬品セットを持参し、殺菌・消毒液の「マキロン」は役立ちましたが、打身用のものは有りませんでした。

▽ 90周年事業のもう一つの候補として、芦安村活性化・大学との連携活動があります。9月から10月にかけて下調べに出掛けます。本格的な活動は来年以降になりますが、「高谷山から桃ノ木温泉へ下るルート」、「夜叉神峠から西口（野呂川側）に下るルート」、等が考えられています。「芦安山岳館」関連の地元の方々の活動を支援し、一橋大学・学生を参加させられるような企画にするべく準備が進んでいます。また、登山道の整備だけに止まらず、植林等の自然・文化活動として、行政を巻き込んで息の長い活動にしたい、と言う意欲的な意見も出てきました。

## ● 山行記録

上原 7／14～15 御岳 御岳の宿坊で泊まりました。エアコンなし扇風機のみ、涼しかった。室内

と山歩きはしなかった。

7／23～24 奈良田 孝謙女帝の足跡調査  
とてもよい温泉。

8／4～6 蓼科ピラタス 東急リゾートト  
レッキング。アダージオで2泊。娘と。東急トレッ  
キングルートはとてもよい山歩きだった。

三井 8／6 富士山清掃に参加。ゴミは余り落ち  
ていなかつたが、それなりに貢献した。江田環境  
大臣の挨拶を2回聞いた。

竹中 7／22 鎌倉散歩（鎌倉駅→海藏寺→源氏山  
→鎌倉山一駅）。町田支部ウォーキングに参加、久  
しぶりの鎌倉。

8／9 御岳山レンゲショウマ鑑賞会。東京多摩  
支部自然保護委員会行事に参加。総勢20名。ケー  
ブルで山上へ→レンゲショウマ群生地→七代の  
滝→綾広の滝→天狗の腰掛→神社裏の山道（2年  
前に開設）→ケーブル駅

本間 8／7～10 塔の岳 新大日・鍋割山往復。  
小学校高学年（4～6年生）の丹沢登山のお手伝  
い（ボランティア）

小島 8／6 富士山清掃に参加。48年ぶりの「富  
士山をきれいにする会」参加でした。

8／10～12 折立から薬師沢小屋往復。11日、  
12日、赤木沢には行けませんでした。

佐藤（久）なし  
高崎（俊）なし  
岡田（雅）なし  
中村（雅）なし

中村（雅）8／10 有峰口→折立→五郎平

（）薬師沢小屋（往復）。小島さん、川名さんと赤

木沢・五郎沢・祖父沢を廻行する予定が、8／11  
夕方、中村が薬師沢小屋で転倒し、無念の敗退。

### ●山行計画

上原 今のところなし

三井 9／28～30 懇親山行 卷機山。新潟・福  
島豪雨で金城山登山路崩壊、復旧の未通し立た  
ず、金城山中止予定。別途連絡します。

竹中 8／19～21 徳澤→蝶ヶ岳。学生3名の山  
行に同行（山根、町田、小宮山）

本間 卷機山・金城山

佐藤（久）8／19～21 徳澤→蝶ヶ岳。上記竹  
中さんと同じ

高崎 なし

岡田 なし  
中村（雅）頭の精密検査の結果が出るまで山行ス  
トップ。

（文責：高崎俊平）

### ■平成23年9月20日■

【出席者】佐難、三井、本間、小島、三森、佐藤（久）、  
岡田、高崎（俊、記録）

▽定例の第3月曜日が「敬老の日」と重なって、今  
回は火曜日の開催となりました。翌日（21日）

は強い台風（15号、R OKE）の来襲で、この  
日にやっていたら「帰宅困難者」が出たかも知れ  
ません。今回も参加者は8名とやや少なかった  
(常連の高橋さん、竹中さん、中村（雅）さん等  
が欠席)ですが、会合そのものは少し振りに賑  
やかでした。

▽待望久しかった「富士山検定1級」に昨年末最高  
点で合格され、TVにも出演された佐難さんか  
ら、富士山にまつわる講義を拝聴することが出来  
ました。今回は、「麗峰富士」の内部構造に関し  
てのお話です。従来は「3階建て」と考えられて  
いたが、今世紀に入つてから、実は「4階建て」  
であること（小御岳火山の下に前小御岳火山があ  
る）が発見された。現在我々が見ている「新富士  
火山」は五つのステージで出来上がつていて、こ  
の第5ステージ目の最後の火山活動が1707  
年の「宝永大噴火」で、宝永大地震（東海・東南  
海・南海連動型地震でマグニチュード8・6、伊  
豆から九州にわたる太平洋海岸沿いに加えて、伊  
勢湾、豊後水道、瀬戸内海、および、大阪湾まで  
入り込んだ大津波を発生させた）の49日後に噴  
火した。活動は16日間続き、宝永火口と宝永山  
が出現した。これに先行する864年の「貞観大  
噴火」で「青木ヶ原溶岩」が流出、北麓にあつた  
広大な湖「せのうみ」を精進湖・西湖に分断した。  
この噴火は、三陸海岸に大津波をもたらした貞観  
大地震の5年前に起つた。等々、次回が楽しみ  
です。

▽北アルプスの奥深く、赤木沢に2年続けて挑戦しながら、2回とも残念な結果に終わって、新調し

た沢登り用の「地下足袋」が「新品」のまま店晒しになつてゐる小島さん・中村（雅）さんが、筆

降ろしに、丹沢の沢に出掛けられました。若い2人（川名さん・古瀬さん）を引き連れて（引き連れられて？）、畦が丸に突き上げるモロクボ沢（白石沢・中川川の支流）を廻行されました。沢の入口にある20mの大滝は捲き道で通過し、念の為に持参したザイルは使わずに済み、快適な沢登りを楽しめた様子です。

来年の夏は、今度こそその意気込みで、赤木沢に3度目の挑戦をされます。なお4人目、5人目のメンバーを募集中だそうです。

▽佐藤さん・上原さんが8月の下旬に北岳に挑戦、無事凱旋されました。甲府から定期バスで広河原へ、改裝されて綺麗になつた白根御池小屋に1泊、大権沢から八本歯のコルに出て登頂後、肩の小屋で1泊、翌日は雨の中を広河原まで下山されました（詳しくはH.U.H.A.C掲載の記録をご覧ください）。ご両人とも本当に元気です。

▽巻機山への懇親山行が9月末に計画されています。米子沢ルートは水害による崩壊が激しいようで、登山禁止になつています。ただし、最近の情報では、ヌクビ沢は登山禁止が解けたようだから、今夏に登つてゐる記録があるとかの話があります。現在は尾根道を行く計画ですが、沢も楽し

す。

### ● 山行記録

佐羅 8／23～24 北岳

同行、上原兄。八本歯のコルから山頂までは予想

よりきつかつた。

三井 9／15 塔ノ岳（大倉尾根）

遠藤君と二人で巻機山トレーニング。往復8時間もかかつた。

本間 なし

小島 9／11 白石沢・モロクボ沢

中村（雅）、川名、古瀬さんと、楽しい沢登りでした。

三森 9／17 鮎ヶ岳（尾瀬）

With後輩（10才下） 16日、日光泊、17日、長藏小屋泊。

8／10 日光男体山

会社仲間と、志津小屋から。

佐藤（久） なし

高崎（俊） なし

岡田 なし

中村（雅） 9／11 西丹沢白石沢モロクボ沢（畦が丸登頂）

小島さん、川名さん、古瀬さんと4人。ナメ、滝、滝と変化に富み明るく気持ち良い沢でした。ザイルなしで廻れる初心者向けには最適なコース。

▽年4回の懇親山行にしても、毎月の三月会にして

も、参加されるメンバーの少數化・固定化の傾向が見られます。「オーション会」（昭和31年卒）から「ヤロー会」（昭和35年卒）に至る一大勢力、昭和50年代以降の若手会員の参加が少ないので寂しい限りです。その昔、「岩殿山」に登つた懇親山行には30人余りの参加者があつて盛況でした。何とか多数の参加者が見込めるような山行を企画したいものです。何かアイデアがあれば是非お知らせ下さい。「針葉樹会」全体としても会員数・活動のジリ貧傾向は否めませんが、90周年事業から100周年を観んで、会の活性化を図りたいものです。

# 針葉樹会会則

(2011年6月23日改訂)

2. 総会は年1回（6月）会長が召集する。
3. 総会の議事は、議事運営細則による。
4. 臨時総会は次の場合に開くことができる。
  - (イ) 会長が必要と認めた時
  - (ロ) 幹事会が必要と認め、会長がこれを承認した時
  - (ハ) 会員が希望し会長がこれを承認した時

第1章 総則  
第1条（名称） 本会は針葉樹会と称する。

第2条（会員） 本会は一橋大学（東京商科大学）

一橋山岳部OBをもつて構成する。

第3条（名譽会員および特別会員） 本会は、本会に対し特に功労のあった者を総会の承認を得て

名譽会員又は特別会員に推举する。

第4条（目的） 本会は会員相互の親睦を図り、か

つ一橋大学一橋山岳部の諮問機関となる。

第5条（関連団体） 本会は一橋大学一橋山岳部と

合同して、一橋山岳会を構成する。

第2章 役員及び機関

第6条（役員）  
1. 本会には会長、副会長及び2名の監事を置く。

2. 会長、副会長、監事は総会で選出する。

3. 会長、副会長、監事の任期は2年とする。

第7条（機関の種類） 本会には次の機関を置く。

1. 総会

2. 評議員会

3. 幹事会

第8条（総会）  
1. 総会は本会の最高意思決定機関で、全会員（名譽会員及び特別会員を含まず）をもつて構成する。

2. 総会は年1回（6月）会長が召集する。

2. 総会は年1回（6月）会長が召集する。
  3. 総会の議事は、議事運営細則による。
  4. 幹事会は本会の執行に関し、必要に応じて特別委員を設け、これに業務の一部を委任することができる。
    - (イ) 会長が必要と認めた時
    - (ロ) 幹事会が必要と認め、会長がこれを承認した時
    - (ハ) 会員が希望し会長がこれを承認した時
- 第9条（評議員会）
1. 評議員会は総会で選出された15名以内の評議員をもつて構成する。会長、副会長は評議員の資格をもつ。
  2. 評議員の任期は2年とする。
3. 評議員会は評議員の互選により1名の評議員会長を置く。評議員会長は必要と認めた時、ならびに、重要な案件に付いて会長から要請を受けた時に、評議員を招集する。
4. 評議員会は本会の目的に関する重要案件の決定を行う。評議員会はその決定事項を総会に報告しなければならない。
5. 評議員会の議事は全評議員の三分の二以上の賛成をもつて決定する。
6. 評議員会は本会の会計年度は毎年6月1日始まり、翌年5月31日に終わる。
7. 経費 本会の経費は会費及び寄付金によって支弁する。
8. 会費 本会の会費は会計細則による。
9. 予算及び会計報告 本会の予算は総会に諮り決定する。
10. 会計報告は監事により監査を受け、総会の承認を得るものとする。

- 第11条（会計）
1. (会計年度) 本会の会計年度は毎年6月1日始まり、翌年5月31日に終わる。
  2. (経費) 本会の経費は会費及び寄付金によって支弁する。
  3. (会費) 本会の会費は会計細則による。
  4. (予算及び会計報告) 本会の予算は総会に諮り決定する。
- 第12条（基金）
1. 基金は本会の活動を活発にするため基金を置く。基金の原資及び使途は総会において決定する。
- 第13条（会則の改正）
1. 本会の会則は総会の決定により改正することができる。

- 第4章 基金
- 第5章 会則の改正
- 第14条（幹事会）
1. 幹事会は本会の執行機関で、1名の幹事長及び若干名の幹事をもつて構成する。
  2. 幹事の任期は1年とする。ただし、やむを得ない事由がある場合は、会長の承認により年度途中で交替することができる。
  3. 幹事会は第4条の目的達成のため登山に関する活動を推進し、総会の決定にもとづき企画、総務、

- 活動を推進し、総会の決定にもとづき企画、総務、
1. 評議員は総会の投票によって選出する。
2. 会長、副会長、監事は評議員の推薦した人に

つき総会の決定にもとづいて選任する。

3. 会員は評議員に立候補することができる。

4. 立候補者が評議員定数を越えない場合は、無投票で評議員になることが出来る。

5. 評議員は全年代を3分し、各年代から均等に選出する。

6. 幹事長及び幹事は前幹事会の推薦したる人々に引き総会の決定にもとづいて選任する。

#### (議事運営細則)

1. 総会は全会員の3分の1以上（委任状を含む）の出席をもって成立する。

2. 総会の議事は、重要案件については出席者の4分の3以上の賛成をもって決定する。その他の案件に関しては3分の2以上の賛成をもって決定する。

3. 「重要案件」とは、規約の改正、組織の変更、会長・副会長・監事の異動、非経常的な支出をする事項、その他会長が重要と認めた事項を言う。

4. 総会の議事運営及び議事録作成は幹事会が行う。

#### (会計細則)

1. 会費は、「普通会費」と「贊助会費」とからなるものとする。「普通会費」は5,000円とする。「贊助会費」は1口1,000円とし、口数は任意とする。

#### (付則：経過措置)

本改正細則は、昭和30年以後に卒業した者につ

いて適用する。昭和29年以前に卒業した者については、「普通会費」についてのみ、なお従前の例（会費を免除する）によるものとする。

2. 会計は証拠書類にもとづき会計処理を行うものとし、証拠書類のない場合は幹事長の承認を得なければならない。

#### (行事一般細則)

1. 幹事会の企画に基づき、山行及びスキー行を行う。

2. 隨時懇親会を行う。

3. その他会員の親睦を計る諸行事を行う。

#### (資格細則)

1. 入会に際しては、幹事会の承認を得るものとする。

2. 3年間会費滞納者は会員たる資格を喪失するものとする。ただし、会費納入再開により資格を復活できる。

注) 名簿からは抹消しないが、※を付し、会報や会合案内の送付は中止する。

3. 会員が本会の会員として認め難い行為をした時は、評議会の決定により、これを除名することが出来る。

▽ご覧のように今回も先輩会員の追悼号になります。中川先輩の実績とお人柄がよく理解できる多くの寄稿を頂きありがとうございます。私も、中川滋夫さんは、卒業後、雪の岳沢に御一緒し、40年経つて、キリマンジャロ登山や横浜カントリーでのゴルフにお付き合いを再開させていただいたばかりでした。追悼文の通り、寡黙で何事にもほんとに真面目に取り組む姿は一生変わらなかつたのだと納得しながらも、大変残念に思っています。心から御冥福をお祈りいたします。

一方で今回も、中村先輩の四川省理塘高原そして三井先輩の日本百名山とお元気な寄稿を頂いています。さらに現役を案内しての蝶ヶ岳歓迎山行も報告されています。会員の元気で明るい活発な活動を期待します。

▽今号は、総会報告や改正された会則、90周年記念事業案なども掲載してページ増になりましたが、これは記録として残しておく意味もありますのでご了解ください。

さて、奥多摩のおやじたちも、仕事でしょっちゅう山に入っているのに、遊びでもよく山に登っています。まあ金のかからないレクリエーションなんですが、今時ならきのこ狩りもかねて出かけます。倒木のあるところをマークしておいて、そこを毎年チェックしてみたままでです。ところが、今年は台風12号と15号のせいで、沢筋にあつた倒木が流さ

れたりして山の様子もけつこう変化したみたいですね。北岳バットレスの四尾根マッチ箱も崩壊しました。そうですが、山の自然も年々変わっているのだとあらためて思います。

(井草)

▽屋久島・宮之浦岳で中川さんと一緒にましたときのこと、食事を済ませ、宴会部屋に集まる中川さんがマルキルに詰めたウイスキーをふるまつてくださいました。「この銘柄、わかる?」と問われ、「私にはわかるはずないな」と思いながら、一口、含むと、馴染んだ味と香りが広がりました。

(蛭川)

いろんな種類を飲んだことがないだけに、迷うことなく「ジョニー・ウォーカー」と答えました。隣で蛭川さんが、「そうそう、ジョニー・ウォーカーだよね」と私に一票入れるなか、グルメで博識な山本健一郎さんが聞いたこともない銘柄をいくつか挙げられました。正解はジョニーレッド。「強敵」を前にまさかの勝利に喜ぶ私は蛭川さん。簡単すぎる質問はルール違反とばかりに悔しがる山本さん。そのやりとりを中川さんは満足気に眺めていました。いろんなウイスキーを試したなかで、「リーズナブルで味がいい」とジョニーレッドに行きました。愛飲されていたそうです。中川さんといえばタバコとハンチングとジョニーレッド……そう言つても、きっと笑顔で応えてくださる気がします。

(川名)

## ■表紙写真解説 ■

おっぽい形をしたピーカーがカニサヤだが、8月8日丸山・中川が初登頂した。左のコルに登り、稜線伝いに登頂後、反対側へ山越えして右のコルに達し下山した。両コルに至る登降路は急な氷河を攀ることになり、核心部では苦闘した末、帰幕は翌午前1時となつた。特に降路のクレバス越えアップザイレンに難渋した、その冒険談を以下引用する(『針葉樹』13号より、丸山記)。

「アップザイレンする方角を見定めていた中川が決心したように『宙吊りになるから頼みます』と声を掛けて来た。次の瞬間ザイルにすごいショックがかかり……容易にザイルの張りは弛まない。後で中川から聞くと、宙吊りの体を振つて対岸に渡ろうとしたが幅が大きくて……振り戻されてしまう。……見当をつけてゆつくり体を近付け、とつさにピッチケルを突き刺してこれに静かに体重を移しからくも渡り切つた、ということだ。」

ヘッドライトも消えかかった闇夜でのこの格闘は、相当スリリングだったようだ。

また、右のカバヤニには、甘利、丸山、中川で、途中キャンプ一つを設け、8月11日初登頂した。